

---

# イルザは僕を殺したい

ペトリョーシカ・ジョー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イルザは僕を殺したい

### 【Nコード】

N7309P

### 【作者名】

ペトリヨールシカ・ジョー

### 【あらすじ】

彼は壊された。壊されて、そして『イルザ』となった。

これは、神懸かったように美しいイルザに纏わる惨たらしくも薄っぺらい狂気と、役に立たなかった騎士の少女の物語。

――たとえ全てが終わっていても、運命は止まらない。

0・『気狂いイルザ』と『消えたバラッド』（前書き）

この小説には、本当にさわり程度ですが、性描写や男性から男性への性的虐待の仄めかしが入る予定です。

## 0. 『気狂いイルザ』と『消えたバラッド』

彼はドレスを着ている。

くすんだような濃い赤紫の艶のない生地を基調に、薄緑色の細かい花柄の布を重ね、褪せたような水色で長い襟を拵えた、どうにも不思議なドレスだ。

彼にはそれが良く似合った。

彼は本当に神懸かったように美しい姿をしていて、しかも成長が止まっているものだから、ドレスが良く似合う女の子にしか見えない。しかし、人がすんなりと彼に魅入ることは少ないだろう。まず彼の中で目の行く所といえば、その夜空を切り取ったような見事な長髪ではなく、血の気の引いた滑らかな白磁の肌でもなく、世の神秘が詰め込まれたような凄絶な貌の造りでもなく、――その、びっしりと生え揃った睫毛の奥にある、碧眼だ。

その緑の瞳は古沼のように濁り、闇がしたたるように濃厚な翳りを帯びている。

とんでもなく不吉な目だった。彼の外見には、これでもかというほど不釣合いな。

ただ、釣り合っているとしたら、その表情と中身だろう。

とても気づかれにくいことだが、彼の顔は始終表情が抜け落ちていて、まるで感情を伺わせない。そしてなにより、中身が問題だった。彼は精神を病んでいる。一人を除いて人間がカボチャに見え、誰とも口をきかず、誰の声も聞かず、物をよく壊し、痛みを感じず、奇矯な行動が目立ち、いつも疲れたようにしている。

一番問題なのが、彼が死にたがりだということだった。

唐突にふっと死んで死んでしまおうとして、止められては何事もな

かったかのように元に戻る。それを延々と繰り返えし、しかし本人は無自覚だ。

彼はいつもの通り、魂が無いような顔をして、何故か部屋の窓縁に腰掛けている。

天井が吹き抜けのように高い彼の部屋において、窓はそれなりに高い位置、イーちようど二階と一階の間くらいイーにある。そんな所に座るのは、危なっかしいことこの上ないと思われるが、ナイフを首に当ててみたり、湯船に沈んでみたりしている彼にとってはなんでもないのであるかもしれない。

しかし、周りはそうは思わないのだろう（あたりまえだが）。

その証拠に、後ろから彼の腰を支えている騎士がいる。

この騎士はエルザという。未だ少女ともいうべき年齢ではあるものの、そのすこし大人びた風貌や高めの背には、立派な女騎士の風格が漂い始めている。

それでも花のような容姿は変わらず、華やかな彼の騎士団の制服がよく似合う。

窓の枠に手をかけ、足をかけ、いざという時のために保険をかけながら、器用にバランスを取って彼の腰に手を回しているイー落とさせないために。

彼はそのことに少しも気がつかないような、それとも気にしていないような様子で外を向き、足を投げ出してぼうつとしたままだ。

彼も、彼女も無言だった。彼は前述の通りたった一人にしか言葉を交わさないし、彼女もそれを知っていて話かけないし、注意もしない。

ただ、心のうちでは延々と問いかけていた。

（イーバラッド）彼女は心の中で彼のことに呼びかけた。

バラッドイーそれは彼の正式な名前ではない。彼はイルザ。皇国の第三皇子、イルザ。バラッドは忘れ去られたはずの彼の幼名だ。

何故ただの女騎士であるエルザが知っているのかというと、海よりはもちろん浅く、山よりは断然低い、単に暗殺除けで騎士の名門、エルザの実家に預けられていたから、という理由がある。

当時のイルザーバラッドは父母から離れた寂しさからか、年の近いエルザに懐き、エルザもまた多少わがままでも美しく愛らしい弟（妹）分にご執心で、騎士の誓いまで勢い余って立ててしまうほどであった。その後いくつかの事情で数年離れることとなるが、熱は冷めやらず、全く変わらなかつた。イーのは、エルザだけだつた、のかもしれない。

バラッドもつい最近まではそうだつたが、いつからかやり取りしていた手紙の文面が次第に乱れ始め、あるときぷつぷつりと途切れてしまった。

何事かと慌てて修行を終えてイルザの騎士団に入団してみれば、すでにこの有様であつたという。

それに重ねて、奇妙なことにイーイルザはエルザ姿が見えず、声も聞こえないように振舞うのだ。再会したときは周りがどういふ事だとざわつく中、エルザだけが納得してしまつていた。特大の衝撃と共に。

エルザが立てた騎士の誓い『それは』あなたをお守りします』等という子供騙しの代物ではあつたものの、その頃のバラッドは本気に受け取つたし、エルザもそれなりに本気で言つたものだつたのだ。それにはしっかりと『守る』の一言が入つていた。イルザに対して、決して誓つてはならなかつた言葉だ。

（ぼくが守れなかつた。いや、守らなかつたから、きみはこうなつてしまつたのか）

エルザは思う。これは己が罪だ、と。

（彼がバラッドでなくなつたのは……ぼくのせいだ）

1・『バラッドの手紙』と『馬鹿なエルザ』（前書き）

一部を改稿しましたが、大筋に変わりありません。

## 1. 『バラッドの手紙』と『馬鹿なエルザ』

いまだ残る白い回転木馬や、小さな石造りの劇場、池の畔にある古い蔦薔薇の絡む東屋、庭の迷路花壇に続く石畳の小道を見ると、明るい笑い声の幻が、頭の奥の遠い過去から聴こえてくる。明るい、楽しそうな笑い声。幼い子供が木馬に乗って笑っている。楽しそうに、楽しそうにー

バラッドの名残は、いつまでも消えてくれそうになかった。そう、エルザがバラッドとかけ離れていればいるほど。

ため息もつけずに、エルザは脚を撫でた。そこには包帯が巻いてあり、その下には打ち身で腫れた赤い皮膚がある。

庭に降りるための階段に腰掛けて、エルザは打ち身よりも濃い赤の髪を風に揺らし、目を伏せた。

この怪我はエルザが原因だった。もう少し正確にいうと、エルザの癡癡的な破壊行動が原因で出来た。

エルザの破壊衝動と行動は振り幅が大きく、今回は強いものがきた。そのため、エルザは髪を振り乱しドレスをぐしゃぐしゃにしながら、お気に入りだったはずの色水瓶を手当り次第に投げ、ペーパーナイフで本をぶっさし、その本をブンブン振り回してガラスの家具を割りまくり、クッションは足蹴、テーブルはひっくり返し、テーブルクロスは窓の外、絨毯にはガラスの破片がこれでもかというほど散らばって、飾り棚は凹み、椅子の脚は折れ、投げれるものならなんでもかんでも物凄い勢いで投げられた。エルザはその内のひとつ、とんでもない勢いで飛んできた小さな辞書を食らってしまったのだ。地味にかなり痛かった。



痛かったといえはエルザもそうだが、エルザの部屋のほうが断然傷んだはずで、事実あの部屋は当分使えないから、すぐ近くの別の部屋に移ることになった。

因みにあの部屋の中で無傷だったのはエルザ本人の体（髪以外）だけだった。あの物投げは高い天井までダメージを与えたらしいし、エルザの身につけていたものは、指輪以外（珍しく履いていた黄色い靴まで）すべてぼろぼろになっていたという。ちなみに今回ほどのものはあまりないが、小さいものから中くらいのものは頻繁に起こるので、エルザの部屋にはあまり大事なものは置いていない。

「大丈夫かい、エルザ」

俯いたままのエルザに、声をかける者がいた。枯れ草色の髪をした騎士だ。

エルザははっと目を開いて、立ち上がろうとした。

「待ちなさい、脚を怪我したんだろう？」

それを手で制されて、仕方なく座ったまま手だけで礼をした。

「ヒューズ副長」

「エルザ様にを百科事典を投げつけられたんだって？」

エルザの隣に座りながら、枯れ草色の髪の男―ヒューズは尋ねた。

「いえ、小辞書です、副長」

「おや。なんだ、軽傷じゃないか。本をぶつけられて包帯を巻いたっていうから、さぞデカイ事典でもぶつけられたのかと思っただぞ」

愛嬌のある笑みを浮かべるヒューズだが、特に愛想が良い男ではない。単に愛嬌のあるように見える笑い方をするだけで、勤務中は執務室かエルザの傍でむっつりと押し黙っている。が、身内には優しく、同じ騎士団の人間と話す時は、大抵優しく笑いかける。

その笑みに勘違いするような女騎士はいないが、侍女あたりが時々起こすようだ。本人はそのことを与り知らず、周りの女騎士たちは気にもとめないが。

怪我をしたエルザに声をかけるようや気遣いはあっても、一部の方面にはとことん何も無い男なのである。

この男の有名な話に、『美を理解しない』というものがある。それは真実だ。一度イルザの外見についてエルザが聞いてところ、「うん？ よく分かんが、凄い迫力だな？」と返ってきた。

そのお陰で男におかしな目で見られる心配のあったイルザ付きの唯一の男の騎士にならされたわけだが、本人はあまり気にしていなかったらしい。数年前までは。バラッドはヒューズに懐いていたが、今のイルザは男性恐怖症だ。ヒューズ相手にはその症状も軽く、触れなければギリギセーフ……かもしれないということだ。試したことはないので、アウトラインは神のみぞ知る。

「軽傷つて……十分痛いですけど」

「何、修行時代ならいくらでもあっただろう。弛んでるんじゃないか、エルザ？」

「た、たるんでません」

弛む。確かに修行時代より肉がついた気がする……とエルザはこっそり全身を見回した。修行不足か？

「確かにそれはたるみじゃあない」

気づかれていたようだ。

「なら、何故贅肉が……」

「女には必要なものらしいぞ？ まあ、詳しいことはベアトリクスあたりにも聞くんだな。男の俺じゃあ良く分かん。たとえば女ばかりの騎士団にいてもな」

ベアトリクス。あの豊満な体の、しかし熊を素手でのせるような女騎士か。確かに参考になるかもしれない。

そう考えてからエルザは頷いて、立ち上がった。

「何だ、行くのかい？」

「はい。部屋の片づけの手伝いに」

家具も損傷していたし、力仕事があるだろう、というのがエルザの考えだ。イルザの宮には侍従に限らず男手が不足しているので、女といえど騎士の力は貴重なのである。

「そうか。なら、俺も執務室に戻るかな。怪我に気をつけるんだぞ、

エルザ。お前も年頃の娘なんだから」

「はい、副長」

エルザは親父くさい事を言った副長に礼をして、エルザの部屋まで歩いていった。

「ああ、エルザ様……」

エルザの部屋に入ると、文机の前で侍女が戸惑ったような顔をしていた。

「どうした？」

「そのう、これを……」

侍女は戸惑った顔のまま、何かの……たぶんエルザが物を投げつけた……衝撃で開いたのだろう、壊れかけの引き出しの中を指差した。「？」

エルザの持ち物に何かあったのかとエルザは訝しみながら、引き出しの中を覗き込んだ。

その中には少々乱暴に詰め込まれた筆記用具と、使いかけの封筒からはみ出た便箋が一枚、仕舞われていた。

その封筒の宛名を見て、エルザは息を飲んだ。

『エルザへ』……そう書かれていたのだ。

（バラッド……の手紙？ ぼくに届かなかった？）

ドク、と心臓が大きく鼓動する。手紙に何が書かれているか……エルザは一瞬恐怖し、すぐにそれを押し込めた。

（もし、恨み言が書かれていたら……いや、ぼくは全てを受け止めなければならない）

（それが僅かにでも償いになるだろう。ずっとバラッドから逃げてきたことの……）

エルザは決死の思いとでもいうべき気分で封筒ごと中途半端にしまわれた便箋を掴み、侍女に謝ってからエルザの部屋を後にした。

昔、ぼくがバラッドに誓いを立てた頃。

ぼくの世界がああ故郷パークランドの屋敷の中だけだった頃。

ぼくらは互いに恋をし始めたのだと思う。始めは淡くて幼い、他の感情に紛れて分からなくなるような、そんなものだった。

日々は優しく、敷地は広がったが、閉ざされていた。そんな中で育つぼくらにとつて、そうなることはとても自然的で、日常の延長上でさえあった。

ぼくらは手に手を取って笑い合い、仲睦まじく遊び、時に些細な喧嘩をした。遊びでは大抵ぼくが彼の手を引き、意地の張り合いでは彼は少し大人びた顔をした。遊びに連れ出すのはぼくの役割で、わがままを言うのは彼の役割だった。

輝く緑の瞳でぼくに笑いかけていた、美しい少年。初めはぼくから手を取った。恋に落ちたのはぼくからだ。バラッドもゆるやかに転がり落ちていったようだった。ぼくらは互いに想い合った。しかし楽しい時間は過ぎ去る。子供は成長し、育ったぼくらには様々な問題があり、欠点があらわになった。怖じ気づいたのはぼくだ。少年のままのバラッドは、ぼくの気持ちから気づいただろう。彼は気持ちに聡かったから、ぼくが彼を重たがり、距離を取ろうとしていることを察しただろう。

彼は泣いただろうか。

事情が重なって王城に戻るようになって何も言わず、修行と称してパークランドに残るぼくにふくれっ面をして散々駄々をこねた彼は、それでも聞き入れないぼくに何を感じただろう。

彼から逃げ出した愚かな騎士を見て、どう思っただろう。

封筒を開ける。蠟燭の炎の灯りに、折りかけの便箋をかざした。

深呼吸をして、窓から月を見つめて数を数え、それからやっと読む  
勇気が湧いてきた。

意を決して、ぼくはそれを読み始めた。

【――エルザへ】

僕はそう書きはじめて、けれどすぐに手を止めてしまった。窓から夕暮れが近づいてくるのに怯えながら、僕は手紙を書いていった。

ドレスの袖が邪魔だ。

少し前ならそういうことに気づく度、すっかりおかしくなってしまったものに意識がいつて、悲しくなった。今はただ、恐ろしい。

こうして手紙を書いている間にも、手が震えそうになる。

(嫌な予感が、するんだ……エルザ)

滲んだ涙をぬぐって、ペンを握り直す。

――これが、最後の手紙になるかもしれない。

もし出せれば、の話。

もしかすると、出せないかもしれない。

そう思うと、ますます筆は進まない。

読まれる事もない別れの手紙を、何故書かなければいけない？

【――僕のことには忘れなさい。誓い破りも不義理もみんな許してあげる】

(どうして嘘を書かなきゃいけないのさ)

奥歯を噛み締める。

「裏切りの騎士に……どうして僕が……！」

けして、許してなどいないのに、何故？

自分に問いただしても、答えはひとつしかない。それだけだ。それ

だけで、僕はエルザに心を砕こうとする。  
馬鹿げたことだ。

(本当、馬鹿げてるよ……)

強張った頬を冷たいものがつたう。

それを流させるものは僕の心臓だ。

熱く心を焦がす、それは恋か。

昔はあんなに嬉しかったのに、今では苦々しいばかり。

恋は苦しく、愛は恐ろしい。

なければよかった、そんなもの。

どちらも僕を傷つける。

【――君がこれを読む頃、僕はもういない】

いない。

僕はもういない。

消えて行く。

消される。

ふざけた名前をつけられて。

嫌な格好をさせられて。

持ち物を燃やされて。

父様には忘れ去られた。

君も僕を忘れるだろうか。

【――さよなら。愛していたよ】

大好きだった。

姉様みたいだったんだ。

君が……君が僕の手を振り払った時、とても悲しかった。やりきれなくて、それに――もの凄く虚しかった。

君は嘘つきだった。

誓いを破られて、もしかして愛されてないのかな、なんて。そんなことを考えて、僕は口をつぐんだ。わがままを言い過ぎたのかな？

君に甘えすぎたから？

(全然会いに来てくれないし……)

きっと君は、今も何も知らずに修行のためだと嘯いている。ペン先に力を込めた。

【ーでも、愛は死んだ】

書きなぐって、それで終わり。折りたたんで封筒に入れようとしたところで、はっと気がついた。粗雑に手紙やペンを引き出しに仕舞う。

ーどうやら、手紙は出せそうにないらしい。

窓の外に太陽はない。代わりに、見知らぬ騎士たちの甲冑がある。僕を守る騎士は、騎士舎に押し込まれ、力と数で監禁されていた。こっそりズボンを履かせてくれようとしたヒューズも、慰めに母様の好きだった花を摘んでくれたエレノアもない。

僕の騎士団は、力の無い女だらけ。僕を守るはずだった事なのに、今はそうじゃない。

ギツと少し音がして、部屋の扉が開く。

狂気の青が僕を射抜く。

椅子から立ち上がったまま動けなくなった僕に、温かかったはずの手が伸ばされる。

ーその手はとても乱暴で、切れそうなほど冷たかった。

(これから起こる事も何もかも、すべてが無くなってしまえばいいのに)

希くば、せめて君が僕を忘れて、幸せになりますようにーなんて、頭の片隅で大嘘を吐いてみた。

現実では青色の狂気が燃えている。僕も、そうなるんだろう。

強く掴まれた肩が痛い。間近に恐ろしい青が迫る。

(これが君の青色だったら、何も怖くないのに)

僕の悲鳴が上がった。手紙は届かず、君は来ない。

頭の中から軽やかな笑い声が響いてくる。麗かな昔日が零れてくる。そして、別れ際の曇った緑の瞳が、脳裏に再生されては消えていく。ぼくはうなだれた。

「忘れるだなんて……出来るはずがないよ」

力のない筆跡が痛々しかつけれど、確かにバラッドだった。明るさの上に無邪気さと甘えが同居して、どこまでも子供っぽく見えるくせに、時折ぼくよりもずつと大人びて見えたバラッド。

間違いない。バラッドは自分がどうなるかを予見していた。きっとこれは、その直前に書かれた手紙だ。封筒に便箋を折りたたんで入れようとしたところで、誰かが来たのだらうー誰が？

ーバラッドがああなつた元凶が。

(馬鹿なバラッド。もういないだなんて。なぜ諦めたんだ)

ぼくは唇を噛み締めた。

(でも、ぼくはもつと……馬鹿だ。大馬鹿者の、大間抜けだ。誓ったくせにそれを理由にバラッドから逃げて、こうなってから尻尾を振りに戻ってくる)

便箋の紙面を穴が空くほど見つめる。素っ気無いようで、苦しみが滲み出すような文面を。

バラッドは優しかった。その優しさや底抜けに明るかった笑みが、破壊されたイルザの部屋にまったくそぐわなかった。

ぼくは身を震わせて、涙を堪えた。ぼくに泣く資格はない。

(馬鹿なエルザー！恋なんてものに惑わされて、大事なものを滅茶苦茶にした)



## 2・『イルザの痛み』と『役立たずの騎士』（前書き）

直接的な表現は避けまくりですが、少々生々しいかもしれません。

## 2・『イルザの痛み』と『役立たずの騎士』

母様が池の中にいる。違う。違わない。イルザは母様だよ。でも母様はー母様は……

こんなに、汚くなかった。

ある夜のことだった。

ほとんど間を開けずにイルザの部屋に夜毎訪れる王が、真夜中、唐突に帰っていったことは。

そんなことはこれまで一度も無かったので、遠ざけられた当直の騎士たちはまったく気がつかず、部屋から遠く離れたところを、ずっと巡回していたそうだ。

その巡回騎士たちに何も告げず、王は慌てふためいて帰っていったらしい。同じく慌てた家臣に連れられて。

つまり、その晩、イルザの傍には誰もいなかったということだ。

その事実を夜が開けてから王の使いによって知り、誰もいないがらんとした部屋を見た騎士たちは、背筋を泡立たせた。イルザがいない。どこにも。

そのことは瞬く間に朝食の席に着いていたエルザたちの耳に届き、エルザは真っ先に手に持っていたスプーンを放り出して食堂から駆け出し、他の騎士たちも次々に食堂を飛び出していった。

ただ、イルザは不思議なことにまだ死んでーというか自殺してーはいなかったし、そう時間もかからずに見つかった。

発見したのはエルザだった。てつきり部屋から遠くの川や森、自殺に適した場所に歩いていったと思っただ他の騎士は、エルザの部屋周りは最初に部屋の確認に来た騎士たちがざっと見回すのみで、白い東屋に白いシーツをひっ被ってぐったりしていたエルザのことは見つけられなかった。

だが、風に煽られたのかシーツがめくられて黒い髪の毛が零れた頃に、部屋に戻っていないか一応確認しておこうとしてそこが見える場所を通りがかったエルザは、すぐに気がついた。

(バラツドロー！)

「イルザ様！」

驚きながらも蔦薔薇の絡む東屋に駆け寄って、エルザははっと目を見開いた。

イルザは東屋の椅子の上で手摺に寄りかかるようにして、何かシーツにくるまっていた。

そして、そのシーツごと全身がびしょ濡れだったのだ。

「な、……………」

何故？ エルザはそう思いながらもとりあえず東屋の中に入り、イルザのびしょ濡れのシーツごと抱き上げようとして、思わず手を止めた。

シーツの隙間から、何か不自然なものが見えたのだ。

エルザは嫌な予感がした。

あえて見て見ぬ振りをしたいとも思ったが結局気になり、恐る恐るエルザはシーツを退けてみてー戦慄した。

シーツの下のイルザは裸体だった。その池にでも飛び込んだように濡れそぼった体は痩せこけ青ざめ、それでもなお美しく、しかし決定的に不自然なものがあつた。

エルザの痛ましく痩せた体には無数の、不気味で訳のわからぬ嫌悪感をもよおすような跡がつけられていたのだ。

そう、つけられていた。きっと、あの王によって。イルザの父によって。

エルザには分からない。この跡が何を意味するのか。  
夜伽の正確な意味も知らぬ少女には分かるべくもない。

(イルザー―あなたは、いったいなにをされているんだ)

エルザは全身這う怖気に身を震わせながら、虚ろな貌で座り込むイルザを凝視した。

死体のように生氣のない、確かに昔、恋をしていた少年を。

何をされていたかなんて、すぐに知れた。そこらへんの(ただしイルザ付きではない)侍女から聞き出せばよかった。彼女らはこの年になるまでなにも知らなかったエルザを面白がり、必要なことから余計なことを面白おかしく叩き込んでくれた。その叩き込まれた衝撃で、エルザの頭は巨人の鎚で思い切り殴られたようにグワングワンとぐらつき、足取りは蚊トンボよりもフラフラだ。

(……………ぼくは、ほんとうになにも知らない……………)  
自嘲の笑みが顔に張り付いている。

これまでエルザは、王が来ると必ず夜警から外され、朝も遠ざけられていたが、この理由がやっと分かった。

こういうことだったのだ。エルザがあんまり子供だったから、騎士団の誰も、イルザの侍女のだれも、エルザにそういうことを知らせようとはしなかった。

エルザがそういうことに耐えられないことも分かっていたのだろう。

(……………イルザ)

エルザは心の中で初めて、イルザと呼んだ。

(……………あなたはこうして狂ったのか)

「バラッドはそれも……………分かってたのかな……………」

―『イルザ』。それはバラッドの母、イグザルテ妃の愛称。

亡き母の名前を付けられ、愛妾のように扱われ、己を蹂躪されて、彼は何を思っただろう。

純粹で、甘やかされた子供だった彼は。

誰とも喋らずに、何を思っているのだろう。

エルザは俯き、立ち尽くして、そして決意した。

(……これを知って動かずに、何を騎士というものか)  
強国の王の愛妾を、狂気で執着されている皇子を連れ出すなんて、不可能に近いというより、ただの不可能だ。絶望的でさえあるし、十中八九捕まり、首を跳ねられる。そんなことになればエルザの症状は悪化するかもしれない。

(それでもぼくは――我慢がならない)

――エルザをどこかに連れ出そう。あの王がいないところに、馬に乗せて。

(たとえ、もうきみが狂気の沙汰から逃れられないとしても……ここからくらいは)

しかし、それから約ひと月、王はエルザの宮を訪れなかった。

### 3・『溺んだ王の黄昏』と『開けられた檻』

それは、どろりとした夢でもみているように濁った青の瞳をしていた。

その暗く昏く翳った目は――彼に良く似ている。

彼とは似ても似つかない造作をしていても、その蠟のように白い肌や、魂の抜け落ちたような無表情が、その狂気をより一層似通わせている。

それは国の王だ。

賢君、マズル十三世――そう、呼ばれていた。寵妃イグザルテが死ぬまでは。他の妃を皆殺しにするまでは。今はこう呼ばれている。

――冬の黄昏、狂王マズル、と。

侍女たちの色話でエルザの魂と脳みその中身が抜けかかっていた頃、イルザは新しい部屋の新品の絨毯の上で、カボチャ人間につかまっていた。はたから見れば、自分付きの侍女に抱きついて座り込んでいるのだが、彼の主観としては目と口をくり抜いたカボチャが侍女服を着ているようにしか見えないのだ。だからイルザの中ではカボチャで遊んでいる、ということになっている。

イルザはそのカボチャの口にお菓子を放り込んでいる。マカロン、マドレーヌ、カヌレ、プディング……次々と放り込まれるそれは、イルザの食べ残しだ。今も大量にお菓子の山が皿に積まれているが、ガラガラになった皿はそれ以上にある。そして、彼のお気に入り、青リンゴも。

カボチャが詰め込まれたお菓子を必死に咀嚼している間、イルザは青リンゴを齧った。それから片手で青リンゴを積み木代わりに始める。一段目を三角形に並び終え、さらに二段目を積み上げ、三段目を完成させて、イルザはもう青リンゴがないことに気がついた。残るはイルザの齧りかけな青リンゴだけだ。

もう無いの？ イルザはカボチャに話しかけた。

「……………」

話しかけたのもまた、彼の主観でだけだ。実際には唇も動いていないし、やっとお菓子を飲み下せた侍女の方を見てもいない。彼は青リンゴの果汁をドレスに滴らせて、ぼんやりしていた。ぐしゃり。

それは唐突だった。といつても、その訪れが唐突なのはいつものことであつたが。

「きやつ……………」

侍女がサツと顔を青ざめ、そして素早く部屋から出て騎士に告げた。イルザ様の癩癩が、と。

グジャア、と靴底で青リンゴが踏み潰される。しかしイルザの体重では平たくなならない。そのことに業を煮やしたかのように、イルザは青リンゴを掴むと、ガシャァン！ 窓に投げつけた。当然ガラスは割れる。

そのまま次々と青リンゴを手当り次第に投げつけ、さらには蹴り上げ、それから何を思ったか割れて尖ったガラスの残る窓に突進しはじめた。カツカツカツカツと赤い靴の音が響く。

エルザは助走をつけて長椅子の上に飛び乗り、そこを駆け、テープルを駆け、飾り棚を踏み台に跳び上がるうとして―後ろから何かに飛びつかれた。エルザだ。しかしイルザは分からない。分けのわからぬまま転げ落ち、そしてエルザに潰された。

「サツ……………」

衝撃に息が詰まる。しかしイルザは痛みを感じない。

イルザが悲鳴を上げるが、イルザには聴こえない。部屋の入り口付近に立つ女騎士が、目を丸くして二人を見ていた。カボチャ人間が群がってくる。

イルザはどつと疲れて、そのまま目を閉じて眠ることにした。

イルザの飛び降り自殺なのかガラスで自殺なのかよくわからないことを強制的に未遂にした後、眠りこけたイルザを見張っていたイルザは入り口の脇に控えた女騎士、ベアトリクスに話しかけられた。

「ねえ、エルザ」

「はい、何ですか？」

イルザから目を離さずに返事をする、ベアトリクスは艶めいた仕草でふうとため息をついた。

「貴方、物騒なことを考えているわね」

イルザは咄嗟に何も言えず、黙り込んだ。

「……ねえ、エルザ。私、貴方のその時々真っ直ぐなところは嫌いではないわ」

「……どうも」

どんな顔をしたものか考えあぐねているエルザに、「でもね、」と強い調子でベアトリクスは言った。

「貴方が今考えているだろうことは、賛成しかねるわ」

「……」

エルザはぐつと唇を噛んで俯いた。

「……危険よ、エルザ。私たちは貴方にそんな目にあって欲しくないのよ」

貴方のこと、イルザ様からたくさん聞いていたわ、と囁かれて、エルザは思わずベアトリクスの方に振り向いた。

ベアトリクスは妖しく微笑んだ。

「すごい惚気ようだったわ。貴方、愛されてるのよ」



イルザを見遣り、うふふと笑う。

それに笑い返す余裕もなく、エルザはベアトリクスを見つめ続けている。

「……ねえ、気づいてる?? 貴方が落ち込んでいるとね、イルザ様はお菓子を食べ残すのよ」

ベアトリクスは可笑しそうに告げた。

エルザは頬を赤らめたりなんてしない。

ただ、泣きそうな顔をした。

誰にたしなめられても、逃亡の算段は手放せなかった。

手放せなかったが、どうも気にかかることがある。

最近、王城は何だかおかしい。

エルザはそう感じていた。

王がイルザの宮から真夜中に慌てて帰ったこともそうだが、それからというものの、いつこうに王がイルザの元を訪れない。広大な王城の敷地を囲む巨大な城壁の内側にはいくつかの宮があるが、イルザの宮以外の空気が、おしなべて何かに怯えたような空気を纏い始めたのもそうだ。

渡り廊下ですれ違った見知らぬ騎士の強張った表情に、エルザは顔をしかめた。

その、夜のことだった。

真夜中に王の使いがやってきて、イルザにこう告げた。

この城から、国から、冬から、

そして謀反の手からお逃げになりますよう、と。

――冠を被った首が落ちた。

#### 4・『嘘つきな僕ら』と『血まみれの抱擁』

いくら狂気に侵されても、僕は覚えている。

見えてもいる。

声も聴こえる。

でも、見えないふりをする。

聴こえないふりをする。

君のことなんて、覚えていないふりをするんだ。

君の炎のように赤くて長い髪のこと、僕の好きだった父様に似た青い瞳のこと、少し怖かった目つきのことも、考えないようにしてる。

でも覚えているんだーあの嘘つきのことを。

でも、僕も嘘つきだ。

涙をのんで書いた手紙は、真っ赤な嘘で塗り固められている。

嘘つきは、嫌い。

誓い破りの騎士は嫌い。

僕を母様だという馬鹿も嫌い。

母様の靴を履かせる奴も、母様の指輪を嵌めさせる奴も嫌い。

忘れてもいいなんて台詞を吐く僕も嫌い。

僕なんて忘れたって思い込もうとするイルザも嫌い。

だから僕は僕を殺したい。

すべてを無かったことにしたい。

誰の嘘も裏切りも、すべてを泡に還して、無くしてしまいたい。

そうするには、まず、夜を待とう。昼間は邪魔が入りすぎる。

そして、父様を殺して、それから君を殺して、そうしたら邪魔され

なくなるから、最後に僕を殺そう。  
みんなみんなみんな壊しちゃえば、無かったことになるよね……な  
んて思ってたら、父様別の奴に殺されちゃうみたい。誰がやったか  
な。ああ、兄様？

「……どうすればいいのかなあ」  
僕は呟いた。

とりあえず、もうドレスなんて着なくていいみたいだ。  
兄様を殺す？ ううん、あのひとは始めから僕の世界にはいないよ。  
なら、手間が省けたってことにしておこう。

じゃあ、君から殺そっかな、……エルザ。

カボチャの群れの中で、君を捜した。

「エルザ」

につこりと微笑むと、君はとても驚いた顔をした。それを無視して、  
おいでおいでと手を招く。後ろ手にナイフを隠して。

そして嘘をつく。大嫌いな嘘つきになる。僕は泣きそうに笑った。

違う。泣いた。何故かなんてもう分からない。僕はもう半壊してい  
た。

「僕はもう、エルザじゃないんだね」

とんだ嘘っぱちだ。

頬に涙がつたう。君はますます驚いている。驚きながら、僕に見惚  
れている。そうだね、美しいでしょう、僕は。そのせいで、ひどい  
ことをされたんだよ。だから僕は美しさなんて嫌い。

君に抱きついた。感動的に。感血極まったように、すべてから解放  
されたように。

でも、違うよ。

すべてからの解放は、ここから始まるんだ。

君の首の後ろに腕を回す。ナイフが首筋に当たって、君がよう

やく気づいた。愕然とした顔が間近に迫る。そのお綺麗な顔に吐き捨てた。

「嘘つき。大っ嫌い」  
目を瞑る。

君の皮膚から血溢れ出すのと同時に、僕は君に口づけた。エルザならたぶん、これで誤魔化されて大人しく殺されてくれると思う。

僕が死ぬために君も死ぬ、エルザ。

そうして『僕』と『イルザ』は崩壊していく。世界は壊れるーはずだった。

ああ……邪魔だなあ。

カボチャが邪魔だ。

元が誰かなんてどうでもいい。殺そうか。でも、騎士に敵うかな。敵わないよね。ううん、どうしよう。とりあえずエルザが殺せればいいんだけど、カボチャたちに引き剥がされちゃった。

「おやめください、イルザ様！」

クツと唇がつり上がる。

愛らしく見えるように小首を傾げて、

「『イルザ』なんて馬鹿な名で呼ばないでくれない？」

よっぽど歪んで見えたのかな。カボチャは息を詰まらせた。

そうだよねえ、君らが守ろうとしたものが、こんなにグチャグチャだったんだもん。シヨックだよね。ーでも、僕が受けたのはそんなじゃない。

でも、どうでもいいよ。だから、そこを退いて。邪魔しないで。

「君、たぶんベアトリクスだよね。君の体つきって、特徴的だもん。間違えてないはずだよ」

カボチャはたじろいだ。

「はい、私でございます、……バラッド様」

「『バラッド』、ね……それも気にいらないなあ」

つめたく微笑すると、彼女は震えた。あれ、そんなに怖い？

うふふ、と白々しく彼女の真似して笑って、棒読みで言っちゃった。

「そこを退いて、邪魔しないで。そしたら許してあげる」

嘘だよ。でも、分かっても魅力的だよね。

「バラッド様、ナイフを渡してください」

男の声のカボチャがよって来た。しょうがないから後ずさった。

「やだよ、ヒューズ。君は分かりやすくいいね、騎士団唯一の男だし……」

なんていうか、万事休すだなあ、と我ながら思う。今僕が死のうとしても、止められるんだなあ、と。

それでも、悪足掻きを試してみた。

「エルザ」

びくつと体を揺らして、エルザが僕を見る。カボチャがその腕をつかむ。忌々しい。

優しく笑って、無邪気を装って呼びかけた。

「おいだよ。遊ぼう、エルザ。ーみんなみんな、無かったことにするんだ」

震える声音で君は答える。

「……みんな殺して、無かったことにするの？」

うん、そうだよ、と頷いて、ナイフを持った手をひらひらさせた。

「まず父様を殺すつもりでコレ持ってただけど、兄様かわりにやってくれるみたい。謀反って、王様殺されちゃうんだよね？」

君は僕に怯えている。悲しいかな。べつにそうでもないよ。もう、僕、けっこうおかしくなってる。

「さあ、来てよ、エルザ。僕の希望。僕の絶望」

それも嘘。だって希望も絶望も、過去の闇に消えちゃった。

そろそろと君が僕に向って踏み出す。カボチャは何故か止めなかった。

そこで気づくべきだったんだ。

近づいてくるエルザに夢中で気がつかなかった。

「――お許しを！」

後ろを振り向く前に、意識は途切れた。

ああ、その声、エレノアだね。

「エレノアカボチャのバーカ」

なんで殺させてくれないの！ と、まるで昔のわがままのように目覚めた少年は駄々をこねる。恐ろしいほど違うその内容を。

彼の見つめるだけで昏倒出来そうな真っ白い貌には表情がない。

ただ、その亡者のような緑の瞳が、闇色の炎を轟々と燃え猛らせていた。

手脚を縛られたその少年を、枯れ草色の頭を垂れたヒューズが抱えている。エレノアカボチャと呼ばれた金髪の女騎士は、その前、集団の先頭を走っていた。

体重が無いかのように軽く、音を立てずに進む騎士団は今、王城の隠し通路を通っていた。

暗く陰鬱で、狭い通路。それは王の使いが教えていったものだ。しかし、それは入り口と入り方のみだ。

詳細はイルザ様がお分かりになられるでしょう、というのが使いの言葉で、そう言うのと直ぐに退出してしまった。

どうすればいいんだ、とエレノア騎士長は考えていた。

戻ればいいとは思わない。イルザと、今回謀反を起こした皇子とは半分血が繋がっているものの、まったく関わりが無い。……過去、皇子が王を殺し、王位篡奪に成功した時において他の王族の男児が殺されなかった試しはない。

過去と照らし合わせて考えれば、間違いなく命はない。

けれど、このイルザが隠し通路の通り方なんてものを、自分が生きるための道筋なんてものを、はたして教えるだろうか？

別れ道にさしかかった。

少年はエレノアを恨めしげに見ている。睨んではいない。その瞳は

暗く燃え立っているが、まるで気力が無いかのようだった。

「……バラッド様」

「……………」

少年は答えない。

『イルザ』だった時に戻りつつあるようだった。彼女らの声から耳を塞ぎつつある。エレノアは焦り、しかし自分を宥めた。

エレノアは首に包帯を巻いたエルザを呼び寄せた。エルザは表面上、もう落ち着いていた。

聞き出しなさいと告げて、ヒューズから少年をエルザに渡した。子供のよ様な体格の少年は、あっさりとエルザに抱えられ、じっとしている。

エレノアたちは、少しだけ距離を取った。

彼を説得出来るのはーきつと、彼女だけだ。

騎士たちの視線の中で、彼らは見つめあった。底冷えするように虚ろな眼と、張り詰めて震える青い瞳が交わった。

「……………バラッド」

「……………」

呼びかけると、彼は遠くのものでも見るように目を細めた。体が震える。

「ぼくがー憎い？」

声が掠れる。

揺らぐぼくとは反対に、無関心な声で彼は、

「君は邪魔」

「……………きみが死ぬために？」

そっだよ、と彼は何でもないことのように頷く。

「きみが死ねば、何も無かったことに出来るって思ってるの…………？」

「うん。……………僕を放っておいてくれるなら、道順を教えてあげる」

にこりともせず、足、解いて、と要求される。躊躇ったけど、「

いつまで僕を抱えるつもり？ それとも、汚い床に転がすの？」と言われ、恐々と解いた。

彼は自分で立つと、前に歩きはじめた。重たそうなドレスの裾が揺れる。

「バラッド？」

「おいで、エルザ」

悪魔の口が裂ける幻影が、振り向いた顔に重なる。行き止まりの場所に後ろ向きに歩いて行く。ゆっくりと。ゆっくりと。歩いて行く、後ろ向きに。前を振り返らずに。

ハッと後の騎士たちがざわめいた。

「エルザ、追え！」

「え、は、」

はい、と走り出した時に、それは起こった。

いびつなドレスの少年が、爆発的に狂笑する。

――緑の炎の後に、無数の剣が蠢いた。



5・『殺せなかつた僕』と『古ぼけた恋心』（前書き）

少し暴力描写があります。

5・『殺せなかった僕』と『古ぼけた恋心』

イルザの後、行き止まりだったはずの壁が無くなり、青い甲冑の騎士がーイルザの兄の騎士団が剣を抜いていた。イルザが嗤いながら、更に後に進む。

エルザの絶叫、エレノアたちの悲鳴、敵の鬨の音が狭い空間に轟いた。

エルザは剣も抜かずに走りー敵は剣を振り上げて足を踏み出しーイルザの騎士たちはナイフを投げ、弓を引く。

そしてーそれは一瞬だった。

床が無くなった。

騎士が投げたナイフも振り被られた剣も青い甲冑も群れもすべて飲み込んで、昏い穴がぽっかりと口を開けた。

(えー？)

ガコ、後に進めた足に床の仕掛けが凹んだ感触がした。

(嘘、これ、僕じゃあ踏み込めないはず……っ？)

体を捻ると、ぶかぶかの赤い靴がー母様のヒールが目に入った。ヒール。そうだ、僕はもう平たい靴は履いていない……。

時間が遅くなった世界で、ぐらりと視界が回っていく。仕掛けの部分が消えて、半分無くなった足場のせいだ。

僕は真つ暗な穴に呑み込まれようとする。

背中に衝撃があったけど、何かは知らない。

上体が崩れて、思わず腕が前方に取り残されるように伸ばされる。

その腕を、君は掴んだ。

「バラッド!!」

「エ、ルザ」

ガクツと腕が引つ張られて、体がぶら下がる。もしかすると、肩がものすごく痛いのもかもしれない。僕には分からないけど。

「はなしてよ」「ー」とは、言えなかった。

「は、う?」

背中がおかしい。

ああーさっきの衝撃。たぶん、背中に何か刺さってる。

「矢が……!!」

「へ、え……これ、矢、なの」

あつちにも弓兵がいたんだ。まあ、みんな落っこちちゃったけど。

ちよつと息が苦しかった。背中にも嫌な感じだ。

ああ……これで死ねたらいいのに、と思いかけた。

君の顔を見上げたら、何も考えられなくなった。

君は泣いていた。

僕の頬に涙が滴り落ちる。

青い空から落ちてくる。

「……エルザ、泣かないで……」

「……泣いてない」

彼女は昔のように意地をはって、唇を引き結んだ。

大人しくしていたイルザは、すんなりと他の騎士に手伝わられて救出され、その後背中 of 矢を抜かれて手当てされた。

今は、しおしおと肩を落として、泣いているエルザの手を引いて先頭を歩き、無言で道案内している。

落ち込んでいるのはイルザだけではない。エレノアは手当ての最中にこの世の終わりのような顔で「わたしたちは騎士失格だ云々」と垂れ流し、ヒューズは口をへの字にひん曲げているし、ベアトリクスは泣き出す寸前で、他の騎士たちも似たような感じだった。

もうかなり歩いたところで、イルザが足をふらつかせた。息も上がっている。

(重い…)

あらゆるものが重かった。

傷を負った体も重いし、やたら絢爛な本日のドレスも重いし、エルザを引く手も重いし、背後の空気も重いし、今の状況も重い。

時よ止まれと人はよく言うけれど、今のイルザには口が裂けても言えそうになかった。

(………。カボチャが鬱陶しくてもどうでもいいんだけど…)

イルザはそろっとエルザを盗み見た。

エルザの泣きはらした目と目が合いそうになって、慌てて前を向いた。

どうしたっていつんだろう、とイルザ半壊していたはずの心でボヤいた。

今の彼女の顔を、目を見ていると、正気が帰ってきてしまう気がした。

(僕が僕を殺すには、正気はいらない)

誤魔化すようにぐいぐいエルザを引っばって、小さな歩幅で一生懸命複雑な道筋を辿っていく。

……どれ程の時間が経っただろうか。

あと少しだ、とイルザは気づく。

あと少しで、ここを出てしまう。

出口を抜ければ、そこは王城の外だ。

自分だけが分かる出口を先に見つけて、イルザは立ち止まり、思わ

ず振り向いてしまった。

「……バラッド……？」

エルザの目に、その蛾のように白い顔は、とても不安そうに、心細そうに見えた。

きゆう、とエルザの手を握る小さな手に力が入る。しかし、エルザが聞いてきたのは、小鳥のように可愛らしい仕草とは裏腹なものだった。

「まだ死んだらいけない？」

「……………」

エルザの目の端に涙が盛り上がってくる。

エルザは心底困ったように顔を背けた。

「やめてよね。君がそうしていると、……殺したくなる」

「やめて」

エルザは泣いた。

エルザは本当に困ってしまった。

……エルザが知る限りでは、エルザはまったく泣いたことがなかった。なのに、なんでこんなボロボロ泣いているんだろう、とエルザは訝しむ。

（以前なら……分かったのかな。僕が死ぬのが、なんでそんなに辛いのか）

（殺そうとしている僕には、もうわからなくなっちゃったみたい）  
エルザはため息をついた。もう、ずいぶん疲れてしまった。

（……兄様に見つかる所に出ようかな。僕以外には、そうとは分からないし）

妙案だったが、あの青い甲冑に殺される騎士団が思い浮かんで、それが王と重なった。

「……どうすればいいのかなあ」とエルザは呟いた。父王の時と同じように。それは「嫌だなあ」というのと酷似していた。けれど、彼は気づかない。

――助けられた、と彼の頭で誰かが囁く。

助けられた。誓いは果たされた。それでいい、と誰かが、過去の自分が囁いている。

けれど、今の狂気がそれを遮る。誓いはもう破られた、自分は裏切られたとヒステリックに叫んでいる。

半壊した彼の思考回路では答えは導き出せず、イルザは考え疲れてしまった。

「……とりあえず、外に出してあげるよ」

手を引く気力もなく、エルザの手を解き、歩き出した。出口に向かって。

ちよつと仕掛けを解けば、すぐに外への扉は口を開けた。――暗い通路の中に、光が差し込む。

扉の脇に避けて、イルザは告げた。

「ここから先は、僕は行けない」

「なら――ぼくたちも、行けない」

「………まだ邪魔をするの？」

耳鳴りのように、頭痛のように過去の自分が叫び始める。

――もついいい！ 許せ！

狂気が記憶を呼び覚ます。

――希望なんてない。みんな、嘘つきばかり。

「バラッド……ぼくはもう、きみを裏切らない」

決然とした目が僕を射抜く。

その青い目が、同じように僕を射抜いた父様の恐ろしい目と重なる。破られた誓いが今の言葉と重なる。

――怖い……！

「僕は君を許さない」

「許されなくても、いい。……ぼくはきみを守りたい……！」

必死に訴えかけるエルザの言葉を、僕は「嘘だね」と一蹴した。

別の言葉が重なる。父様の言葉が。優しくない父様が。

今とすぐ近くの昔がごちゃ混ぜになって、僕を襲つ。

――怖いよう……！

――痛いよう……！

――助けてよ……！

――誰か！

――誰か！

――エルザ……！

――エルザ、助けて！

――エルザあああああああああああああああ！

どんなに叫んでも救いは来なかった。痛いし気持ち悪いしほんとうに恐ろしくておぞましかった。

「いくら叫んでも君は来なかった……」

僕は穢された。たくさん、たくさん、乱暴された。泣き叫ぶ声は黙殺された。暴れる腕は押さえつけられた。折られたこともある。あんまりうるさいと口に何かを詰め込まれた。段々目を開けられなくなって、耳障りな音を聞きたくなくて耳を塞いだ。君が来たのは僕が蹂躪されつくした後だった。僕は本当に喋れもしくなくなった。

「誰も助けてなんてくれなかった……！！」

今、僕がこうしていられるのはあのひと月があったからだ。父様が来なかったひと月……誰にも酷いことをされなかったひと月……。

「僕を助けてくれたのは兄様だよ！　？　父様を殺して、僕も殺そうとしてくれる！」

「――それがきみの救いなのか、バラッド！？」

「死にたいんだ！」

僕は心の底から叫んだ。

「それが僕の救いなんだ、エルザ！」

「……嘘だ……」

――どうして君がそんな傷ついた顔をするんだ。

君は魂に亀裂が入ったかのような顔で棒立ちになっている。絶望そのものの表情で立っている。

急速に過去の声も、狂気の叫びも弱まり始めた。

代わりに強く湧き上がったのは、錆びているんじゃないかというくらい、ぎこちない何かだった。

「……………」

急に何も言い返せなくなる。泣きそうになる。忘れていた痛みが――よみがえってくる。

ああ、死んでしまいそうだ。

とてつもなく痛かった。背中 of 傷なんてこれに比べれば物の数にも入らない。

何がそんなに痛いんだろう、と崩壊寸前の心で考えた。今なら分かる気がした。

これは、エルザを傷つけたから？

（何を今更――殺そうとしたくせに。泣かせたくせに。ほら、見なよ、あの首の包帯）

両手で胸を押えた。潰れた心が暴れだす。

古ぼけ、色褪せ、瓦解した恋心の、最後のひと欠片が僕を追い詰める。



6・『君のとなり』と『加速しだした運命』

「『嘘つき。大っ嫌い』とイルザに言われた時。ぼくはとても胸が痛かった。

その直後にキスなんかされて、ほんとう、甘いやら泣いてるやら柔らかいやらしい匂いがするやら人前やらそもそも殺されかかっているやらでもう訳がわからなくなったし。最低だつて頭突きでもしてやりたかったけど、立ち直る前に息の根を止められるところだった。

そこからきみは益々訳のわからない言動をして、平気で人を殺そうとした。嫌な笑みを浮かべて見せた。人の顔が分からないなんて初めて知った。それからひどく騙されて、怪我されて、殺したいなんて言われて、誓い直そうとしたら散々詰られて、腹の底から死にたいんだ、なんて叫ばれた。

嘘だと思いたかった。

イルザは光を避けるように立った扉の脇で、闇に紛れきれずに泣いていた。

ぼくを騙そうとして流した美しいだけの虚ろな涙とは違う。緑の瞳のまっ暗な翳に遮られていた傷が晒され、その深くえぐれた傷口が濃み、血が溢れ続けているのが見て取れた。

そんな傷ついたままで死んでしまおうなんて、馬鹿だ。

涙を流さぬまま泣いているきみを、どうして放っておけようか……！

「……イルザ」

静かに呼びかけると、死にそうな声が返ってきた。

「……………っ。……………なあに……………」

少し引つかかったけど、置いておくことにした。

「きみは、どうしても死にたいって言うんだね」

「……君は、嘘つきなのにまた誓おうとするんだね」

「……そうだよ」

ぼくは息を深く吸い込んだ。

「ぼくは……きみを愛している」

「……………?」

きよとん、とイルザは瞬いた。

「きみは、ぼくをもう愛していないのか？」

効果は劇的だった。

「えっ……」

イルザは微かに赤くなった。うわ、何これ嘘、と自分の頬を押さえる。動揺のためか目が潤み、だんだん林檎よりも真っ赤になっていく。「うそぉ」慌てて俯いた。

こんなに動揺するとは思わなかった。てっきり冷たく何それとでも言われると思っていたのだ。

にわかにも自分も恥ずかしくなってきたが、無視した。

返事を待たないで彼の手を取り、跪く。

イルザが震え、怯えたように愛してないとわめき始めた。

温度の下がったその貌を見つめる。

「ぼくは君を救いたい。きみを愛しているから、そんなに傷ついたらままじゃ、いかせられない。きみの死は救いじゃない。ただの終わりだ。悲劇の終幕。でもぼくは、そんなの認められない」

「……きみの運命はまだ止まらないって、信じてる」

嘘だと傷つけられた自分が喚き立てている。泣き叫ぶ。過去のように。また裏切られ、酷いことをされるんだ。それなら死んだほうが

いい、今すぐ死ぬ、剣を奪って喉に突き立てるがいい！  
ひと月分の平穩が作った思考力が吹き飛びそうになる。  
心の残骸に過去が、渦巻く。恐ろしい記憶も、その前の温かい記憶も。すべてが混ざり、混沌として、訳がわからない。  
諦めて思考力を手放すと、答えは心の破片が叫ぶ事しかなかった。

嘘でもいいー信じたい。

君と歩む運命を得たかった。

古びた恋心は今や夜空の星よりも輝き始めて止まらない。

勝手に僕を微笑ませ、

勝手に手を握り返させる。

無意識の領域で操られたように口が動く。

「ー信じるよ、エルザ。また再び」

青い目を大きく見開いて、君こそが救われたような笑みを浮かべる  
顔から目が離せない。

君は立ち上がり、僕の手を引いて、扉へ踏み出した。

一歩先に君がいる。

光の中に君は立つ。

僕も一歩踏み出してー

君の隣に、立った。

## 6・『君のとなり』と『加速しだした運命』（後書き）

これにて本編は終了いたします。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

後で後日譚か何かを追加投稿するかもしれませんが、その時はまたよろしく願います。

エンドロール 『君の隣で考えた』（前書き）

ちよつと本編のラストが物足りないかな、と思い、本当に少しですが追加しました。

エンドロール 『君の隣で考えた』

隣にいながら考えた。

この爛れ落ちた恋心で、僕は君に何をしてやれるだろう。

この恋の欠片は強く輝いているけれど、それもいつまで続くかわからない。

僕の心はまだ壊れたままで、戻る見込みなんてない。

心の残骸に埋もれていたものが今、僕に光を差しているけれど、それはとても、とても脆い光だ。

いつかこの光は潰えて、この恋は二度目の終わりを迎えるだろう。

ーそれはきつと、僕の死を意味する。

だから、僕の運命が完全に停止してしまう前に、いったい君に何をしてやれるだろう、と思う。

僕の未来は無限じゃない。未来はすぐそこに迫り、僕を追い立てている。僕はいつ死んでもおかしくないんだ。

兄様の追っ手が落とし穴だけとは思えないし、追っ手から逃れて女だらけの騎士団を抱えてどこに行けるかも分からない。

それなのに、愛することすら不十分で、心も壊れかけで。体さえも成長し切れなかった自分に、何ができるだろう。

……繋いだ手を放さない事くらいは、出来るだろうか？

君に笑いかける事くらいは、出来るだろうか？

まるで心が元どおりになったように、振舞えるだろうか？

分からない。…分からない事だらけだ。昔はもう少し分かったような気もするけど、今はおかしくなった目しか持っていないから、し

ようがない。

一寸先の未来さえ、僕の目では見通せない。  
だから、僕は現在において、行動する。

君の手を握り締め、

君に精いっぱい笑いかけ、

昔の自分の真似をしよう。

未来なんて僕は知らない。

僕に未来は無い。

だから今、僕は君に笑いかける。

上手く笑えたかなんて知らない。

その答えは、君が知っている。

――僕の知らない一寸先で、隣の君は笑う。

未来の在る、君が。

エンドロール 『君の隣で考えた』 (後書き)

まだまだ読んで下さって、ありがとうございました。



リトルアフター 『きみを救う奇跡』(前書き)

これはエンドロールのすぐ後の話です。

次の最新までにはまた少し時間が経ってしまいそうです。

パチパチと炎が木の枝を喰う音がする。

きみに灰が舞い落ちてくるのを、ぼくは手で払った。

「……エルザ、それって結構意味ないかも」

「……………」

すでにいくらか灰を被ったイルザが目を瞬かせるのを無視して、ぼくは上着を脱ぎ、彼に頭から被らせた。彼は咎めるような視線を寄越す。

「寒いでしょう、エルザ」

ぼくは首を横に振った。寒くなどない……はずもないけれど、今空に広がっている夜のような彼の髪に灰が紛れるよりは耐えがたくない。

イルザは普段血の気のない、寒さで薔薇色になった頬をふくらます。その子供じみた所作に、ぼくがどれだけ安堵しているか、彼は知っているだろうか。

——あのととき、ぼくがしたのは危うい賭だった。

成功していなければ、きみはもうここにはいまい。

どうして成功したのかは、分からない。まったくだ。今でも不思議に思う。

けれど、それが重要なことではないとは絶対に言えないけれど、ぼくは思う。思うんだ——

(……きみが、生きていて、よかった……)

きみが死ななくてよかった。

きみは、ぼくが騎士団に入る前に死んでいてもおかしくなかった。

涙を流さぬまま、惨たらしく傷つけられたまま、孤独に逝ってしまった。なんらおかしくなかった。

ここにいるのが奇跡みたいだ。

魂切るように引き攣れた叫びが、耳の奥に木霊する。

神懸かったように美しい貌を歪めて、きみは叫んだ。凄惨な過去の傷口を開いて、けれど、きみは本当の涙を流さない。

それが何故かなんて、いくらでも想像がつく。

――きみの黙殺された悲鳴や、言葉や、涙が。

狂っても憎まなかった父に、しかしきみが抵抗しなかったはずがない。

助けを呼ばないはずがない。

涙を流さずに、いられるはずがない。

きみの無為になった涙や、再び預けてくれた信頼に、ぼくは報いられるだろうか。

( いやーそうじゃない )

ぼくは同じ倒れた枯れ木に座り、むくれたまま夜空の星を見上げる彼に手を伸ばした。なめらかな、少し痩せた頬に触れる。焚き火に照らされた緑の瞳がきらめきながらぼくを見る。

( 必ず、守ってみせる )

きみはぼくの手のつめたさに顔をしかめた。

「 やっぱり、寒いんだ。エルザの馬鹿。僕、君が寒いと嬉しくないよ」

ていうか、見てると寒くなるよ、と彼は文句を言う。

ぼくがそれに口元をゆるめると、彼はすこし戸惑ったように口をへの字に曲げた。

それから「しかたないなあ」と何かを誤魔化すようにため息をついて、ぼくの上着を持ち上げると、ぼくの頭に掛けた。

あ、こら、と言おうとした口はすぐに封じられた。

イルザの体温がぼくに寄り添う。

「…イルザ？」

「こうすれば暖かいよね！」

うかれたようにきみが言う。

肩に擦り付けられたきみの顔は見えない。けれど、はしゃぐようにブラブラと脚が揺れている。

見ていると、それが唐突にぴたりと止まった。

「……ねえ」

かすれた声がぼくに囁く。

「僕の新しい名前、君が考えて」

「えっー？」

「僕が生きるためには、必要だから」

母様の名前じゃ、もう生きられないーと、彼は吐息のように細く告げた。

ー彼は生きようとしている。すべての過去を呑み込んで。

(きみはもしかすると、……ぼくより強いのかな)

ぼくは唇を噛み締めるように頷いた。

「うんーぜったい良いのを考えるから」

共有した小さな天幕の陰で、僕ときみは顔を合わせた。

息を飲むほど綺麗な緑の瞳が、ひどく間近にある。

きみの手がぼくの頬を包み、ぼくの手がきみを抱きしめる。

さらに近づいて、気づいた。彼の目がやけにきらめくのは、涙で潤むせいだった。

閉じた瞼の端から、涙がこぼれる。

唇が合わさる。

きみの唇はつめたかったが、相変わらず砂糖菓子よりもあまくて、溶けてしまいそうに柔らかい。

唇はあっさりとうつっていった。

きみは近づけすぎた顔を離して、涙のつたう赤い顔をうつむかせた。

「君はお子様だから、ここまでだよ」

べつに照れすぎて死にそうなわけでもないよ、と涙を拭って、きみは悪戯に笑いかける。

きみという奇跡が、今、笑っている。

これからも、きつとー

リトルアフター 『きみを救う奇跡』（後書き）

ん。  
少し読みやすいように編集しましたが、内容に変わりはありません。

## 夜へと続く扉（前書き）

これは一応、壊されたバラッドの後日譚ですが、蛇足の続編なので、  
パラレルワールドに片足を突っ込んでいます。

## 夜へと続く扉

ある日唐突に扉が開いて。

次の瞬間その子はいきなり飛んできて。

扉の前に転がった。

なんだなんだと物陰から少し乗り出して見れば、外の光の中に、怪しい影が数名。

ぱたんと閉まった扉の向こうに見えてしまった。

「……………」

地面を見やればうつ伏せで目を回す少年が一名。あと、その横にひっくり返ったボウル。

この少年が目を覚ますまで、どうにもなりそうになかった。

ある日唐突に扉が開いて。

次の瞬間怪しい奴らが家に上がり込んできた。

突然のことに声も出なくって、棒立ちになってしまった。

怪しい仮面の奴らは、ずりずりと長い裾を引きずりつつ、床に何か書いたり、壁に立てかけてあった箒を逆さまにしたり、本棚をいじったり、ティーポッドを確かめたり、寝室から枕を持ってきたりしたけど、意味が分からない。分からないんだけど、意味があったらしい。

よく分からない扉が出現して、ぱかりと開いた。

仮面たちが頷きあう。

いやいや一寸前までは無かったはずだよ、と作っていたプディング



グの元を抱えて震えていたら、問答無用で怪しい扉向かってにぶん投げられた。そういえばこの怪しい仮面、一言も喋っていない。今日は厄日じゃない、怪日だと苦し紛れに思ったけど、扉の向こうにも仮面が見えたので、やっぱり厄日かなあと考え直して、気を失った。

## おやすみの夜

あの世は三つあるという。  
ひとつは天国。  
ふたつめは地獄。  
みつつめは名無しの世界。  
行き場も無く消えてゆく、墓標のないものたちの、おやすみの夜。

目が覚めたら地面に寝ていた。  
状況はちんぷんかんぷんだが、とりあえず薄暗い場所に放り込まれたらしいことは分かった。  
あとは、したままだった前掛けがたぶん土で汚れたことくらいか。  
暗い中、地面から身を起こしながら考えた。あ、そうだプディングはっと思渡せば横に見なれたボウルがあった。  
逆さまで。

「……………!」  
泣けた。

しかし堪えた。

ボウルを拾って立ち上がる。

「……………あれ?」

プディングの元がボウルの中にある。

揺らしてみても変わらない。足元を見ても、何も落ちていない。

おかしいなあ、と思いながら周りを見渡してみた。

暗くて、遠くまでは分からなかった。

いくつか柱や何故か瓦礫がある。廃墟みたいで、なんだか開けた場

所みたいだけれど、明かりはない。ただ、何処からか薄い光が漏れて来ている。

振り向くとあの扉があったけど、ぴったり閉じてる。

……誰もいない。

しん、とした空気が、今更ながらに身にしみて、しかも寒い。

春の陽気に包まれていた村の家を思い出すと、泣けてきた。

べそでもかいてやろうか、と思った時のことだ。

「君、君、どうしたの？」

明るい声がかげられた。

勢いよく振り返って、でも誰もいない。

「だ、だれ？」

ざり、と瓦礫の向こうで音がした。

誰がいる！

ほーっと胸を撫で下ろして、ぼくは瓦礫を覗き込んだ。

陰にいた。

暗くて見えないけど、いた。

「ねえ、きみ……ここが何か、分かるかな？」

尋ねれば、すぐに返答は返ってきた。

「分かるよ。ここはね、トンネルの奥なんだ」

「トンネル？」

扉はあつたけど、トンネルなんてあつたかな。

首をかしげると、陰に潜む誰かがもぞつと動いた。

「ついておいでよ。見せてあげる」

たん、と軽い音がして、誰かの影が移動した。

「え、」

あつという間に離れて行くのを、呆然と見送りかけて、慌てて「待つてよ！」と追いかけた。

足音だけがした。プディングがちゃぶちやぶ揺れている。

柱を何本か超えると、ほんとうだ、トンネルがあった。小さなトンネル。真っ暗な口がぁいてる。

「ほらね？ トンネル」

そこに立ち止まっている、誰か。

子供の足だけが見える。何だかやけに華麗な靴を履いた華奢な足だった。

それが後ずさって、後ろの間に呑み込まれる。

「おいで、おいで」

ちよつと躊躇って、けどぼくは追いかけた。戻ってももう、誰もいない。

ぼくは闇に呑まれていった。

真つ暗なトンネルを抜けると仮面がいた。

「……………」

またか！ という思いを堪えて、ぼくは仮面を観察した。

明らかにさっきの怪しい仮面とは違う。その真つ白い仮面は何故かぐにやぐにやと表情を動かしているし、被っているのは僕と同じぐらいの少年だ。判然としないが、暗い色の髪はたぶん黒で、見ない服を着ている。

「あの」

「うん、なあに？」

にこつと動く仮面。不気味だ。

「ここは、いったいどこなのかな」

暗い世界。昼間だったはずなのに、空には月が出ていて。周りにあるのは、影ばかり。

「ここかい？ ここはね、あの世だよ」

「あの世？」

嘘だ、だってぼくはまだ死んでない。ちよつと怪しい扉をくぐつちやっただけだ。くぐりついでに生死の境をくぐってなんかない……と、嘘だと思いたいが、ただの夜にしては変だし、さっきから怪奇現象しか起こっていない。いったいどうなってるんだろう。途方に

暮れてしまいそうだ。

「本当だよ。現世のお隣さんなんだよ、ここはね。天国や地獄とは少し違う。あれは遠そうだよねえ」

あの世は、みつつある。

ひとつは、天国。

ふたつめは、地獄。

みつつめは……………

「名無しの、世界？」

「正解！……………でも、違うね。ここは名無しじゃない。知られてないだけで、ちゃんと名前があるんだよ」

首をかしげた。

彼は告げた。

「『おやすみの夜』。こここの住民はね、そう呼んでるんだ」

みつつめの世界、おやすみの夜。

ぼくらの世界のお隣さん。

でも、来てしまったら、ぼくもこここの住民になってしまうのかな。

「それはないんじゃないかなあ」

「そ……………そうかな」

てくてく歩きながら、彼は首をふった。長い黒髪が揺れる。

ぼくの出て来た扉はぴったり閉まって開けられそうにないようだから、とりあえず彼の家へ誘われるままについて行ってる。

知らない人にはついて行ったら駄目よ、と言われているものの、この状況だとしょうがない。

「君はちゃんと心臓の音がするもの。つまり生きてるってことだね」

「うん……………あれ、きみは？」

そういえば、ここはあの世だ。

あの世の住民は振り向かない。

「僕？ 僕は止まってるよ」

「止まっ……」

きつちり死人だったらしい。

「あ、心配しないで。死体みたいに腐ったりしないから」

「え？ 死体じゃないの？」

心臓止まってるのに？ ぼくはまじまじと前を歩く彼の背を見つめた。

「うん。僕らに本当の意味では肉体はないからね。幽霊とだいたい同じかな」

亡霊は明るい声で答える。

ぼくは、何と書いていいか分からなくなった。

彼は死人だ。

ぼくと同じ年くらいの死人。

何故、天国にいけなかったのだろう。

「……きみは――」

「――着いたよ」

遮られる。

見れば、確かに薄明かりにぼんやりと浮かび上がる家の前に立っていた。

ぼくの小さな家とそう変わらないが、二階建てで縦に長い。たぶん、石造りだ。

煉瓦で組まれた玄関に立って、そこだけ木で出来た扉を押しながら振り向かれた。

「続きは、中に入ってからにしよう」

## 墓標とお茶会

『光の画』というものがある。

世界を四角く映し出す不思議なもので、たいていは偏屈な芸術家が稀に生み出し、そしてそこで終わり、数枚だけが世に残る。

作り方も定かではない旅人の置き土産の中に、灰色の髪 of 紳士がいる。

美しい碧眼を細めて、彼はずっと前にいなくなった。

おかえり、と出迎えたのは、またもや仮面の人だった。

彼と同じ仮面を被ったその人は、彼のお父さんだった。

ぼくを見つけると、にっこりと仮面を動かしたまま、どうぞ、とだけ告げて引っ込んでしまった。

「ごめんね、父様は子供が少し苦手なんだ」

苦笑する仮面を被って、彼はぼくを家にした。

端っこの竈から香ばしい匂いがしている。その上ではポッドが置いてあって、湯気が立っていた。

ポウルをテーブルに置かしてもらいつつ、勧められた木製の椅子にぼくは座った。

彼は不思議なカンテラを持ってきて、少し狭い丸テーブルの中央に置いた。

カンテラの中身は青い花で、ぼうっと光る白い光の粒をこぼしている。

「……花が光ってる」

「変だよな。でも、この唯一の光源なんだ」

やっぱりあの世なんだなあ、なんてことを思っていると、彼がティーポッドから苦勞してお茶を淹れるのが見えた。慣れない手つきで彼がティーカップを運んでくるのを見ると、落っことすんじゃないかなあなんて思ったが、それでもなかった。

「どうぞ」

「どうも」

彼が対面に座ると、なんととはなしに緊張した。けど、それはすぐに解けた。

ぼくが紅茶に口をつけた瞬間、彼はあっさり仮面を外した。あんまり無造作に外すものだから、ぼくはしばらく仮面が外されたことに気がつかなかった。

彼が紅茶を飲み下した時、やっと気がついた。

「あ、仮面」

ぼくはちよつとした衝撃を受けたが、彼はなんでもないように頷いた。

「うん。さすがに仮面を被って紅茶飲むのはね……」

あはは、と笑う顔はやはり見えにくい。けれど、見えにくくとも整っていることは分かった。

輝くような緑の瞳が、カンテラの光を映し込みながら瞬いている。何か似てるなあ、と思う。

「……………」

沈黙が降りる。

なんとなく家を見回すと、月明かりの差し込む窓際に花が揺れていた。

「あれは、母様が好きだった花だよ」

ぼくの視線に気づいた彼が説明を付け加えた。

「そうなんだ。……お母さんも、一緒なの？」

そうだとしたら、少し羨ましかった。

ううん、と彼は首をふる。



「僕と父様だけだよ。母様はね、天国」

かすかに嬉しそうに微笑む。

「そっか。天国かあ……」

父さんもいるかな、という呟きは、彼に聞こえてしまったらしい。

「父さん？」

「うん。ぼくの父さんは、ぼくが小さな頃に風にさらわれたんだって」

「…いるんじゃないかな、天国。風が連れて行ってくれたさ」  
明るく笑う気配がした。

そうか、風か。だとしたら、いいな。

「そうだね」

一口、紅茶を飲んだ。さつきはよく分からなかったが、不味くない。美味しくもなかった。

「きみつて、坊ちゃんだったの？」

淹れ方もぎこちないし、服装も高価そうだ。

「あ、不味かった？」

「ううん、不味くないよ」

「美味しくもないけど？」

ふつと彼は吹き出した。

「まあね。僕はさる国一番の坊ちゃんだったよ。姫君みたいに大切にされていた」

彼は懐かしそうに目を細めて笑う。

「おかげで紅茶ひとつに苦労してるよ。お菓子作りは何でかましなだけでね」

「へえ。でも、死んでいるのに、食べないといけないのかな」  
「いいや」

月が雲に隠れて、緑の目がほとんど見えなくなった。

静かな声音だけが聞こえてくる。

「僕らはね、ただ、眠ることだけを求められているんだ。時々起きるけど、それだけ」

「……眠る？」

「そう。こつ聞いてないかい、『おやすみの夜』だつて」  
かた、とティーカップがテーブルに置かれる。中身は空だった。

「ああ……聞いているよ」

「ここはね、弔いの場なんだよ」

「弔い……」

「僕らは……お墓も、葬送もなく、消えていったものなんだ」  
お墓も、葬送もなく。

それってどんな気分なんだろう、とぼくは思った。彼は少し、ため息をついた。

「僕らはね、本当の意味では死人じゃない。墓標なんだ」

「墓標？」

「そう、墓標。魂が眠るのを待ってる、いわば墓場なんだよ、こつて」

墓場。それを聞いて、やっとぼくはぞつとした。

ぼくは墓場でティーカップを握っている。死者の墓標と向かいあつて。

## チーズの行方

家の裏手には墓がある。粗末だけど、白くてきれいな墓がある。真っ白い墓標にはいつも柔らかく編まれたリーフが掛かっていて、周りは花の咲く狭い庭。春の間中ずっと満開の、美しい庭。

暗い夜の墓場で、その墓標はぼくに語りかける。

「このこと、だいたい分かった？」

「……………うん」

ぎこちなく頷いたぼくを見て、彼は微笑した。

「話しすぎちゃった？ ごめんね、怖がらせたよね。ここは静かすぎて、つい喋りたくなるんだ」

たしかに、しんとしている。今もこの世界では何かが眠って、消えゆくとしていいるんだろうか。

「大丈夫だよ」

半分嘘だった。この夜は恐ろしい。でも、だからといって彼を怖がるうとは思わなかった。

彼はただの、忘れられた死人だ。

「そう？ 僕はしばらく眠らないから、ゆっくりして行ってね」  
ゆっくり。その言葉にはつとまった。

「う、ううん、ぼく、早く帰らないと」

「怪しいのがいるところに？」

椅子から浮きかけた腰が止まる。

「な……………なんで知ってるの？」

「見てたんだ、僕。君が投げ込まれるところ」

隠れてたけどね、と彼は付け加えた。

むっと竈から漂ってくる薫りが強くなる。

彼が立ち上がった。

「ケーキが焼けたみたいだ。ちょっと待っててね」

「……うん」

雲が動いて、月明かりが戻ってきた。

月光を浴びて揺れる花を眺める。

いつまでもここにいるわけにはいかない。でも、帰ろうにも扉が開

くか分からないし、開いても怪しい奴らがいる。

どうすればいいんだろう……。

物思いに沈んでいると、ふわっと鼻先にいい匂いが掠めた。

「あはは、ちよつと焦げちゃったけど、気にしないでね？」

顔を上げると、彼が円いケーキをテーブルに置くところだった。

表面はこんがり焼けた狐色で、平べったく、装飾のたぐいはさっぱ

り無いのが彼の服装と正反対だった。

「あ、そういえば前掛けとかしないの？」

ぼくはしてるんだけど、と自分の前掛けを引っ張ると、彼も手を伸

ばして引っ張ってきた。

「？」

「何、これ。知らないや」

「ああ、」

そういえば坊ちゃん育ちの子だった。

「料理するときに、服が汚れないようにするんだ」

「へえ……じゃあ、僕がしても意味ないよ」

「どうして？」

彼は前掛けから手を放した。

「ここだと汚れは放っておけばきえるもの」

それは、便利というかなんというか。

「だから僕たちが生活出来るんだけどね」

「そうなんだ」

「そうだよ」

ふふふと彼は笑って、ケーキナイフを手を取った。

「僕、後片づけなんてしたことないしね」

スッとナイフの切っ先がケーキに沈む。

スッ、スッと切っ先が出入りし、きれいな三角に切り取られていく。

フォークと一緒に皿に盛り付けて、彼は僕の前にそれを置いた。

「めしあがれ……で、合ってたかな」

「合ってるよ。いただきます」

ひとくち口に含んで、ぼくは首をかしげた。

なんだか知っているような、慣れているような味がする。食べたはずもないケーキなのに。そういれば何ケーキだろう、これ。

「美味しいね。何ケーキ？」

「それが、僕にも分からないんだ。作ってるレシピが分からないなんて、おかしいよね……」

でも、ここはおかしな事ばかりだよ、と彼はボヤいて、緑色の目を伏せた。

そのまま正体不明のケーキを頬張ると、「うん、知らない味だ」と眉を寄せ、「でも僕にしては美味しい」とフォークをケーキに刺す。ひよひよいと食べ進めて、彼の切り分けられた分はすぐに無くなった。

「たぶんチーズケーキじゃないかなあ、これ」

ナフキンで口許を拭きながら彼は言った。

「チーズケーキ？ チーズなんて入ってたのかな」

「一応入れた記憶はあるよ。あんまりチーズ風味じゃなかったけどね。……たぶん、失敗作だったんだよ」

「きみが失敗したの？」

「かもしれないね。僕はまだまだ修行中だもの」

にこっと笑って、彼は仮面を被った。仮面がぐにゃっと笑う。

今更だけど、気になった。

「あのさ、それ」

「うん？」

指差すと、仮面の目が、というより穴がまん丸くなる。

「どうして動いているのかな」

「さあ」

さあつて。ぼくは呆れた。

「分からないのに被ってるんだ」

「だって、面白いでしょう？」

彼は妖しく微笑む。仮面は、怪しく微笑む。

「へんなの」

「くつく。でも、面白いだけじゃあ四六時中被ってなんかないよ」

仮面が突然への字に口の端を曲げた。

「どうしたの？」

「うん、ちよつと悲しくなって」

「なにが悲しいの？」

「仮面」

いったいどうしたんだろう。悲しみの形に歪んでいく仮面に、もしかして呪いの仮面か、とぼくは思い始めた。

なんてことだ、彼は呪われてしまったのか！……、なんて。ちつとも面白くないジョークだ。微妙に真実味があるから、気味が悪い。

「この仮面を被っているにはわけがあるんだけど、話してもいい？」

また怖がらせるかもしれないけど、という彼を、ぼくは上目遣いで見やった。

「呪われないならいいよ」

「なにそれ」

彼はくすくすと品よく笑った。

「呪われないよ」

「ほんとうに？」

「そんな呪いなんて無いって。……君は怖がりだね…、ちょっと彼女に似てるかもしれない」

彼は懐かしそうだ。

彼女って誰だろう。

病んだように白い小さな手を仮面に這わせて、彼は語り出した。

密談のように、声をひそめて。

「ーこれさ、父様もしてたの、覚えてる…？」

## 過去と未来話

母さんよりも料理が上手かった、  
母さんを誰よりも愛していた、  
誰も守れなかった、  
風にさらわれたフレイ。  
父さん。この世でぼくの名前を一番最初に呼んだひと。

「正確には僕らは何にもしてないんだけどね。ただ、それでもやっぱり恐ろしいことが起こったのは事実で、すんなり笑い合うには暗すぎてね」

「……………」  
「だからね、ちょっと合わせる顔が無いかなあって、お互い思ったんだ」

「……………それで、その仮面？」  
「なんか変だなあ。」

「そう。でもね、これが結構深刻なんだよ」  
「何が起こったのさ……………それに、きみらじゃないって？」  
「ううん、と彼は首をひねった。少し沈黙。  
そして、彼はそつと口を開いた。」

「……………むかしむかし、といってもあれからのくらい経ったかなんて知らないけど……………とっても仲睦まじい夫婦がいてね。子供も生まれて幸せで、毎日笑暮らしてた。夫婦喧嘩もあつたみたいだけど、僕は見たことなかったなあ……………」  
仮面が外して、彼は自分の頬を撫でた。冷たそうな指先だった。



「その子供はね、妻にそっくりだったんだ。男の子なのにね、瓜二つだったんだよ。髪の色や、目の色さえ、寸分違わなかった」  
自分の目をなぞって、彼は遠くに視線を投げかけた。薄明るい光に照らされて、顔の下半分だけが柔らかくも流麗な曲線を晒している。

ぼくは黙っている。不吉な気配がしても。聞く前から、分かったことだ。

「とっても幸せだったんだけどーある日、妻が亡くなってね。夫はおかしくなったんだ。だんだん気が触れていく中で、妻にそっくりな子供に妻の面影を重ね始めて、それから坂を転げるように子供を忘れ、妻がいるんだと思い始めた……」

「……………」  
唾を呑み込む。自然と息が詰まって、すこし苦しかった。

ふ、と短く息を吐き出すと、その音で我に返ったのか、彼は目を見張ってぼくに視線を合わせた。

「……………」  
ああ、よくよく考えなくても、君くらいの年頃の子にする話じゃなかったね」

「え」

「終いにしよう」

唐突すぎる。ぼくは焦った。

「つ、続きは？」

「気になるの？」

「……………」  
うん」

「んー、じゃあね」

少し間が空いた。

「二人とも死んだよ。…………でも、僕らはそうじゃないけどね」

「……………」  
？」

「壊れたものなんだよ、僕ら。壊れて戻らなかったもの。過去のものだね。生きて、死んだ彼らじゃない」

「……………」

分かったような、分からないような。

「つまり、おかしくなる前の夫と子供？」

「そういうこと」

にこつと彼が笑う。仮面が被りなおされる。

「だからね、僕らは何もしてないし、されてないんだけど……起こつたことは知ってるから」

だからー仮面被って、誤魔化してるんだよと、寂しげに微笑まれる。

「過去の、もの……」

不思議だった。

ぼくは確かに現在を生きているはずなのに、過去の人間と対話している。

「あの、きみさ……きみの未来は……」

もう、死んでるのかな？ とまでは、言えなかった。そういえばさつき、死んだとか言ってたしなあ。

予想に反して、彼は少しおかしそうにした。

「あはは、別にそんなこと、遠慮しなくていいのに。……それにね、

僕の結末はそんな不幸じゃなかったよ」

「そうなんだ」

ほつとしたけど、さて。不可解でもあった。

「本当はね、きつと未来なんて存在しなかったんだ。僕は壊れて、そのまま潰えるはずだった」

すつと背筋が冷えるようなことを、彼は平然と告げる。でも、実際には背筋が冷えるくらいじゃ済まなかったはずだ。

それでも彼は、幸せになれたのだろうか。

ぼくはじつと答えを待った。誰かの話しを真剣に聞くのは、最近じゃあんまりなかった。

「けどね、彼女が……僕を救おうとしてくれる人が、いたから」

輝く緑の瞳が鈍る。ハッピーエンドを語る顔が曇る。

「僕は未来に連れ出されて、不幸のままにはならなかった」

どうしてなんだろう。

彼はまったく嬉しそうじゃなかった。

「……その割に、嬉しそうじゃないんだね」

彼はもちろん、と大きく頷いた。

「だってね、不幸から未来へ引つ張っていかれたのは、僕じゃないんだもの」

僕は、ほら、この通り。

薄暗い月夜の下で、過去の墓標は目を眇めた。

「……きみは、救われなかった」

「うん」

「きみは……不幸せなの？」

「そうかもしれないけど、さてね」

君はどう思う？

彼はぼくから目をそらして、天井へ視線を向けた。

二階の、父へ。

「僕は今、元々の暮らしや境遇を壊されて、悲運を押し付けられて、元凶と墓場で暮らしてる。それを、君はどう思うの？」

言葉にされると、ますます重たい状況だった。

ぼくはテーブルに置いていたボウルを抱えて、中身のプディングの元を覗き込んだ。プディング。彼のチーズケーキとは違う、レシピの分かったお菓子。

父さんのレシピから作った、菓子。

顔を上げた。説得力の無さそうな声が出る気がしたけど、仕方ない。ぼくには父さんなんて遠い話なんだから。

「……きみはきつと、とても不幸なんだと思う。けど、ぼくはやっぱり……うらやましい、かな」

「君には父様がないから？」

彼は怒っても、喜んでもなかった。無表情でぼくをじっと見ている。ぼくは、少し悲しく思った。父さんがいない。ぼくにはいない。彼には、母さんも、未来もない。

「うん、そう。でも、こころも思うよ。ぼくは、父さんがいなくても幸せだったよ。母さんがいたから。さみしかったけど、幸せだよ」「だから、そう、そろそろ帰らないと。怪しいひとたちがうるついでいても、ぼくの家には帰らないと。母さんが、待ってる。」

「きみは今、父さんといられて幸せ？」  
果たして、彼は微笑んだ。

## 夜にさよなら

一輪の花のように木陰で揺れていた影に、人が落ちた。

目を閉じたその顔は、ただただ穏やかに静止して、風に舞う灰色の髪にさらさらとくすぐられていた。

花よりも美しい、それは亡骸のようだった。

冷めたチーズケーキをほっておいて、ぼくらは家を出ることにした。

「大丈夫だよ、帰る頃にはお皿ごと元に戻ってるから。ティーカットもね」

彼は、よく見えないが飾り付けられた羽のシルエットからして華麗そうな帽子を被って、玄関から出た。

ぼくもそれに続こうとした時、きい、と軋む音がした。扉が閉まる。閉じた扉の前で振り返ると、階段から彼の父さんが降りてくるところだった。

夜闇の中で白く浮き立つ仮面に、金の髪が被さっている。

その仮面が、おもむろに外された。

あっ、とぼくは息を飲んだ。

肩から流れ落ちる金の髪、透かせるように透明な青の瞳、神経質に痩せた頬、滑らかな額、薄く高い鼻梁、そしてたぶん彼とそこだけそっくりな蠟のように白い肌。

カンテラを持ち、ちょうど月光に照らされる窓辺に佇んだ彼の姿は、思いの外よく見えた。

どうしてだろう、と思考のすみでぼつんと呟く。

どうしてこのひとは、ぼくとそっくりなんだろう。

そっくりなひとは青ざめて見える白い痩せた手をぼくに差し出している。

あんまり働かない頭でそのことを認識すると、手に何かを持っていることが分かった。

反射的に、ぼくは何かを受け取った。

まじまじと見てみると、それは棒付き飴だった。カラフルで大きなペロペロキャンディーが、ぼくの彼とは大きさの違う手に握られている。

「持つていくといい、客人」

薄く微笑んで、そのまま階段を登っていく。

ぼくがようやく、お邪魔しましたなんていう合ってるんだか合っていないんだか分からない返事を返した時には、彼はすっかり二階の間に消えていた。

「ねえ！ どうしたの？」

彼の子が呼んでいる。

もう、行かないと。

「……他人の空似」

口に出して呟いて、なんとか納得しようとした。

暗闇、トンネル、空洞。

境界を曖昧にする暗やみを、手を繋いで走った。

タンタンタンタンと二人分の足音が反響する。

薄ぼんやりした月明かりの入り口を、もしくは出口を頼りに進み、そして到達した。

今日の始まりに。

扉は何故か、薄く開いていた。

ぼくらはその前で立ち止まる。

扉の隙間からは、闇の中からみれば眩い光がこぼれているが、扉を開けた先にあるのは光だけではない。

仮面。

あれはなんだろう。

あれはいったい。

どうすればいい。

ぼくは立ちすくんだが、しかし、扉に手をかけた。するりと繋いだ手が解ける。

振り向きたかった。

けど、やっぱり扉を開けてからにすることにした。音もなく扉が開く。

ぼくの目を、光が刺した。

ぐっ、と目をつぶって、ゆっくりと目を開く。

母さんがいた。

……わが家だ。

……家、なんだけど……。

母さんの足元らへんがおかしい。

具体的に言つと、

待ち伏せていたらしい仮面が襪雑巾になっていた。

「う……うぐ……イルザ皇子……おのれ、たかが女騎士一匹が……」  
般若の形相をした母さんのブーツに踏んずけられた襪雑巾仮面は不気味に呻いていた。

扉を開けた瞬間、母さんは一瞬前までの般若の仮面をかなぐり捨ててぼくが開いた扉の方を振り返って、そして、

「――」

絶句した。

母さんが見ているのはぼくじゃなかった。

ぼくの後ろ。

彼だ。

ぼくはどうしたんだろうと後ろを振り向いた。

闇と戦っているかのように揺らぎ、たわむ光の中で、彼は佇んでいる。

にこつと線と点の笑顔を作った白い仮面がずらされて、その面が覗き、そして、完全に晒される。

彼はぼくと同じくらいの年格好の少年だった。

蠟のように白い病的な肌が、彼の父と酷似している。

性別を超越した神秘のかたまりは、曰く、彼の母さんと瓜二つ。

華麗で豪華な服を纏って、彼は母さんの代わりのように、少し驚いたようにぼくを見ていた。

ぼくも、彼を見ていた。

手から抱えていたポウルとキャンディーが落ちる。カラン、と音を立てたけど、気づかなかった。

ひどく、似ていた。

違う、そのものだ。

いや、そうじゃなかった。

彼は過去。

過去の――ぼくの――

「父、さん」



彼は美しく微笑んでいる。

「やあ。本当に祖父様そっくりに育ったね、ウィル」

ひらひらと小さな手をふって、父さんはぼくの名を呼んだ。

祖父様。父さんの父。他人の空似じゃあ、なかったんだ。

「僕はバラッド。フレイとも呼ばれることに、なるね」

夜空を切り取ったような黒髪が頬にかかるのをそのままに優しく微笑み、そして、ふっと色を無くした碧眼を、母さんに向けた。

「久しぶりだね、お馬鹿さん」

かちん、とは来なかった。

言い方のわりに、悪意の微塵も感じられなかったからだと思う。

小さな父さんは、複雑そうに眉をしかめ、ため息をついた。

「泣きそうな顔しないでよ、情けないなあ、もう」

少しむくれて、ふんつとそっぽを向く。かなり子供っぽい仕草だった。

入れ替わりに、ぺしっと何かが母さんに当たった。見てないけど、たぶん仮面だ。

「許す」

手紙でも言ったんだけどね、と子供のすねた、ぶっきらぼうな声が告げた。

「だってね、やっぱり君のこと、愛しているものーエルザ」

「……………バラッド……………」

かすれた声だった。今にも折れそうに儚いそれは、聞いたことのないもので。何かが床に崩れる物音がしても、ぼくは振り返れなかった。

「ウィル」

父さんがぼくを見つめる。

痛いほど真剣な目だった。

「ごめんね、長く生きられなくて。でも、フレイもきつと君のことを愛していたから」

許してくれる？ と父さんは首をかしげた。ぼくは、頷いた。

「……ぼく、好きだよ、父さんのこと。……家に、たくさんあるんだ、父さんからの贈り物。絵本とかレシピとか、色水瓶とか、色々。母さんがぼくのためだって……嬉しかった」

「……そっか」

口元が緩んだぼくに、父さんは一歩踏み出して、手を伸ばす。抱きしめられた。

目を閉じる。

まだ子供の小さな父さんの体格は、ぼくよりも僅かに大きく、華奢で、肩が薄くて、滑らかな衣服からは良い匂いがして、白い肌は意外に温かかった。

いつまでもこうしていたかった。

けれど、唐突に優しく引き離された。

「もう、行かないと」

なごり惜しげにぼくの肩を掴んだまま、父さんは告げた。

思わず腕にしがみつくと、苦笑される。

「ウィル」

かがんで、ぼくの落としたポウルとキャンディーを拾い上げ、それをぼくに渡す。

手を離す。

ポウルはつめたかった。

「エルザみたいな顔しないの」

頭を撫でられる。

と、髪に何か差し込まれた。

父さんも何か髪に差した。

花だ。父さんの母さんが、お祖母さんが好きだった。

一輪の水色の花。光の中で、可憐な造形がよく見えた。

父さんがぼくの髪を指差して、言う。

「おそろいだよ」

触れると、柔らかい感触と、かすかな花の匂いがした。

うん、と頷くと、さあ、お行き、と促された。

ゆっくりと踵を返した。足が重い。

光の下に母さんが座り込んでいる。

近寄れば、腕を広げて抱きとめられた。

そのまま扉を振り向くと、扉が閉まり始めていた。

父さんがまた、闇に閉ざされようとしている。

「さよなら」

にこつと笑った父さんに、ぼくらは笑い返せただろうか。

こんなことなら、笑顔の練習でもするんだった。

母さんの腕に力が入る。

さよならバラッド、と母さんが呟いた。

さよなら、とぼくは鸚鵡返しにして、扉が閉まるのをただ見ていた。

キャンディーを握り締める。

目に焼き付けるように白い美貌を見つめていると、扉の向こうの闇

が濃くなるにつれて、世界が滲んで見えた。

ぼたぼたと何かが床に落ちて染みを作る。

「あーあ、君らはやっぱり怖がりなんだね」

くすくすと明るい笑い声が夜の向こうに聞こえて、そして、

ぼたん、とあっけなく扉が閉まった。

あれから数日経っても、まだかすかな夜気のなごりが、家の中に漂っていた。

さわさわと窓から風が入ってくる。

そういえば、向こうには風があつただろうか。

そんなことを思いながら、ぼくは壁に掛けられた額縁の前に立つ。

『光の画』の中には、相変わらず灰色の紳士が妻と寄り添いあつて微笑んでいる。

子どもするときより凄みを増した美貌と、肩で切り揃えた灰色くなつた髪。伸びた背丈にこの国風の衣装を纏い、朱色の髪の美しい妻を抱き寄せて、木漏れ日よりも優しい笑みを絵の中から投げかけている。

そして中心には、二人で抱いた金髪の赤ん坊。

母さん共々そうは見えない、三十路の、遅く子を授かった幸せそうな夫婦がいた。

(舞台裏) 花葬を夢見て

トンネルを抜けると、また夜が待っている。

そろそろ眠らなきゃね、と考えて、そこでふと思った。

これで最後かもしれない、と。

目覚めぬ眠りにつくかもしれない、と。

そう思いついて、嘔き出した。

そのまましばらく笑う。

ああ、なんて夢見がちな想像だろう。

でも、いいなあ。そうだといいなあ。

とてもいい思いつきだったので、眠るまではそういうことにしておこう。

僕は上機嫌で頭の花を弄った。

この花をたくさん摘んでこよう。

それで家を埋め尽くして、母様の好きな花に埋もれて眠ろう。

その前に父様と遊ぼうか。

もう仮面は無いから、父様の仮面もひっぺがして目を合わせよう。

意味不明なケーキを焼いて、不味い紅茶を淹れて、そしてたくさん

お話して、キャンディーをもらおう。

それを口の中で転がしながら眠るんだ、父様と手を繋ぎながら。

父様は抱きしめてくれるかなあ、と先ほど抱きしめた父様とそっくりな未来の子供を思い浮かべて、幸せだなあ、スキップでもしようかなあ、と僕は夜空を振り仰いだ。

おやすみなさい、母様！



(舞台裏) 花葬を夢見て(後書き)

読了、ありがとうございます。

いくつかの謎(というほどでもない)を残しつつ、この外伝はここで終わります。仮面やらなにやらの事は、後々に書ければと思います。

一気に未来に飛んだり過去が出てきたり、うっかり第四の世界に入っちゃったりと、色々あつて混乱されたかと思いますが、この話は「子どものバラッドの甲い」が基礎です。

「おやすみの夜」のことももっと書けたらよかったですけど、それもまた後々となります。

といつても、またしばらく、更新は出来なさそうですが、なんとなくか、また少ししたらひょっこり出てくると思つので、その時はどうぞよろしく願います。

## Op・『青眼に瞬く狂気』

――いくら逃げても、恐怖は追いつがってくる

僕の歯車はガタが来ているのに無理矢理潤滑油を入れられて動かさ  
れていて、最近は何を被りながらそれに沈まないようにあがいてい  
る。

その泥は死だ。

幾人もの騎士の死。

追っ手に見つかってしまったまでは天国じみでいてさえした逃亡の旅  
は、短く燃え尽きてただの泥に塗れた惨劇と化し、僕らに襲いかか  
ってきたのだ。

女たちが死んでいく中で、エルザは僕を抱えて必死に逃げる。

仲間を屠られるその胸中にははかり知れない。僕だって、彼女らの死  
にちっとも悲しみが無いとは言えないし、特に古参の騎士がいなく  
なれば、戻りたての痛みが疼く。

でもきつと、エルザほどじゃないんだろう。

エルザは死にそうな顔をしている。

僕もそれを真似ているけれど、それだけじゃない。いくらかは自然  
と浮かんで来ているようだ。

息を潜めた旅の合間では、彼女らが何を、どうして僕にかけて国を  
出ようとしていたのかは散り散りにしか聞けなかった。

でも、取り戻した温かさが削り取られるようで、辛かったのかもし  
れない。



騎士の心得をかなぐり捨てるとような勢いで主人を抱えて逃げるエルザたちは、まるで生きた炎だ。短くも激しく燃え立ち、そして消えゆく炎。

僕を守るうとする炎の騎士たちは、何を思いながら死んでいったのか。

まだ僕と走っている騎士は、何を、何かを考えているのか。

僕の騎士は今、とてもひどい顔をしている。絶望に追いつかれそうな、そんな顔を。

君のために笑いかけるのも虚しくなる。それでも微笑もうとして、向かい合った形相に凍りついてしまう。

怖ろしかった。

間近に迫り、はこびる死よりも、君の青い目が同じ色の狂気と重なり始めてきた気がするの。

とても、怖かったんだ。

## 01・『死神が肩を叩く』

朽ちかけた家屋の暖炉の前で横たわりながら、ふうとため息をつきかけて、止めた。

すぐ横で規則正しい寝息がする。入り口ではヒューズが起きて寝ずの番についていて、窓の脇で壁に持たれてエレノアが寝入っている。これは珍しいことだ。エレノアはいつも見張りをしたがった。団長の責任が彼女をそうさせるのか、殺された騎士たちに対しての何かがあるいはまだ生きている僕らに対しての何かがあるのかは知らない。

けれど、エレノアのたおやかな白い頬は少し痩せた。ほんの少しだけだ。置かれている状態がこうでなかったら、もつとひどい痩せ方をしていただろう。その方がよかった。エレノアが心置きなく部下の死を嘆けるようになったらいいのに。

はやく、ならないかな。

そうすれば……エルザも。

そつと手を伸ばして、彼女の手を握る。そのまま胸元に抱え込んで目を閉じた。

あたたかな手。細くも剣を握る、少しだけ硬い手。この手は、あの乱暴で冷たい手とは違う。

でも、すぐそこには闇がある。

それは現実の暗やみでもあったし、心の闇でもあった。

冷たい闇の中、思う。この闇に死者は宿るのだろうか、と。

僕のために死んでいった騎士の魂は、いったいどこへいくんだろう。切り捨てられて墓もなく、遺骸を野晒しにされて、弔いもされない彼らはどこへいけるのか。

もし、このまま墓も建てられなかったとしたら、彼らは永劫闇の中

を彷徨うのだろうか。

天国にも、地獄にもいけないとしたら……せめて。

どこかにあるという、名前も知らない世界へいけたなら、いいのに願くば、この逃亡の旅の結末が、彼らの墓を建てられるくらいには平穏でありますように。

僕はそんなことを考えたが、先行きは依然、不透明なままで。嵐の予感だけは、止まないでいる。

ふつと目を覚ますと、なんだか温かい。

「……………ん……………?」

もぞ、と動くと、「起きたか、イルザ」と囁く声が、至近距離で聞こえた。

「ごしごし目元をこすって、目を開くと、赤い髪が目の前にある。」

「んむ、エルザ……………?」

「おはよう」

「……………おはよう」

囁き声で会話を交わし、のろのろと身を起こしてみると、そこはイルザの背だった。つまり、おぶわれていると。

「重くないかい」

「べつに。きみはちいさくて軽いから」

「……………。ありがとう、もう起きたから自分で歩くよ」

よく分からないけど、うん、何か、男として情けない事を言われた気がする。いや、重くても困るけど。

それに、イルザにおぶわれるのは嫌いじゃないから流すことにした。地面に下ろしてもらって周囲を見回すと、まだ薄暗い夜明け前の森の中だった。街道ではなく獣道をすいすい歩いていくエレノアが前方に見える。

「行こう、遅れる」

「うん」

自然に差し出された手を握って、少しだけ慣れた舗装されていない道を歩き始めた。

少しの優しさ、前に行くエルザの顔が見えないことに安堵して、落ち込む。ああ、なに安心してらんだらう、僕。

沈む気分を押し殺して、足を動かすことに集中しようとしたけど、頭の中は色んな事がグルグルと堂々巡りをする。

追っ手の事、死んだ人たちの事、まだ生きている騎士と、その精神にかかる重圧の事、時折エルザの目にちらつく狂気の事。

この歩みにまた追いつかれるのは、どのくらいか、とか。そうしたら今度は誰が殺されるのか、とか。そもそも全滅するんじゃないか、なんて。

決して口には出さないけれど、きっと皆が思ってる。

仲間の死を悼む暇もなく、僕を逃すために歩を進める彼女たちは……

その胸に希望はあるのかどうか。

広大な冬の大地を抜けようと国境を目指して暗がりを進み、騎士の証を薄汚れたロープで隠し、転がる屍

しかばね

を踏み越えて、何を指すんだらう。

(君はいつたい、何を考えているの?)  
分からない。

冬を抜けたその先に、屍を踏み越えたその道に、何があるというのか。

君という運命の歯車が、軋みを上げて壊れゆくのを目の当たりにするかもしれない。

エルザ、僕は君を信じてるけどー君がいつまで正気でいられるかは、知らない。

人が壊れる時の脆さを、僕は知っている。

## 02・『心を象る暗やみ』

「う、あ、あ、あ……………」  
ずるりと刃が引き抜かれる。

はく、と開閉する口から、言葉の代わりに血が、ああ、血が、ながれて。

命が流れていく。

彼女の名前を叫ぼうとして、声が出なくて、剣を抜こうと、いや彼女の身体を受け止めようと、したのかも、しれない。

息が苦しい。うまく、呼吸が出来ない。

それでも、ぼくの身体は動く。

ぎらぎらと光る剣の刀身にぼくが映る前に、相手の懐に、もしくは背後に、死角に飛び込んでー首を貫く。一番、切れやすいから。何にも覆われていない、薄い皮。柔らかい肉。太く、無力な血管。

それを断ち切って、血が噴き出す前に飛びずさる。じり、と土をえぐる足は、以前のように痛むことはない。ただ、疲労が積もっていた。

「…………エルザ」

うつくしい声がぼくを呼ぶ。

その声音が含んでいるのは、恐れか、悲しみか。ぼくには分からない。

イルザ、イルザ、イルザーーまだ名前を変えられないきみ。覚えてるんだ、あの約束を。でも、考えつかない。考えられないよ、きみの、新しい、新しく生きるための、名前。

そう、それは希望じみた光のようでー

こんな暗がりじゃ、どうやっても見つけられそうにない。

あなたは万華鏡の夢でも見ているような寝顔をしているわ、と、一昨日いなくなつたベアトリクスは言っていた。ならエルザはどうなのかと聞いてみたら、知らない人のは分からないわよ、と笑われた。それもそうだ、その頃のベアトリクスはまだエルザに会つたこともなかつた。ただ、ぼくのエルザ話によく付き合つてくれていた。最近は、誰も彼もが塞ぎがちで、黙り込むことが多かつたけれど、本来彼女はおしゃべり好きで、笑っている事が多かつたはずなのだ。なんで僕なんかに着いてきたのやら、とは、思つてはいけないんだろうか。許されるかな、それくらい。でも、悪いかな。

ごめんね、ベアトリクス。僕は万華鏡の夢はもう見ないんだ。見れないんだ。

真つ黒いー闇を溶かした黒が、広がっている、夢の中。せめてこれが夜空だと言えたなら、彼女らも少しは報われたらどうか……。

冷たい腕や青い目の転がる悪夢に、いつしか突き立つ剣の墓標。華奢な形の、鋭い剣。

柄の色も長さも見慣れたそれは、彼女たちの剣。

こんなところで埋葬しても意味が無いのに、それは増え続ける。

(無駄なことを) (でも、人間らしいかな) (どうだろうね) (僕が殺しているの?) 転がる『僕』と囁きあう……というより、独り言か。壊れた部分とはいえ、僕であることに変わりはないから。

(万華鏡は) (死骸を探れば) (出てくるかも) (でも動けないね)

(僕脚がないや) (掴む手がない) (ああそういえば)

(君なら動けるんじゃない?)

ぐるり、と緑の目がいつせいに僕を見た。

「……動いたら、崩れてしまわないかな」

(大丈夫) (崩れても) (運んであげる)

ぬっ、と闇の中から青白い手が伸ばされ、僕の腕を掴んだ。

(慎重に)(まあ君も残骸だしね)(まだまだ保つんじゃない?)

(とりあえず、ほら)(誰が一番持っていそう?)

「バラッドだよ。バラッドが持つてる」

万華鏡を夢見ていたのは、彼だ。

(そう)(そうだね)(どこにいるの?)(どこに)(いない)(

遠くに?)(いないよ)

(いないね)

(万華鏡、なくなっちゃったね)

そうだね、とため息をついた。手がするすると離れて、闇に消えていく。

万華鏡があつたら、さて、どうなっただろう。

(どうにもならなかった、かな)

(エルザにも、あげられないし)

エルザ。

君はまだ、万華鏡の夢を見ているだろうか。

(――見てるわけ、ないか)

せめて真っ黒くなければいいんだけど。

(いやいや)(絶対黒いよ)

笑いを含んだ声がして、それを最後に闇が除けられていく。

――朝が来る。目を開けて、遠くへ行かなければならない。

夜明けの遠い、月の照らす午前。

泥のように眠るエルザの顔は、とうてい安らかとは言えない。

(やっぱり、真っ黒けなのかな)

さら、と寝乱れた赤い髪を手ぐしで梳く。

細い骨格。薄い胸。疲労した脚。

痩せた、手。

いつかきつと……。

いつか、

きつと？

( 『いつか』がくる前に)

この細い人は、壊れてしまわないと、どうして言える？  
ぐっ、と乾いた唇を噛む。

( どうにかしたいのに)

そう思ってから、いや、違う。僕は首をふった。

( どうにか、するんだ)

ほんの僅かにでも、力があるのなら。



### 03・『力なき神懸かり』

悪夢のように美しい自分の貌を見ると、この役立たずと罵りたくなる。

本当にこの顔は役に立たない。印象どうりに悪夢を背負ってくるだけである。

(しかも顔から下もどっこいどっこい)

これで何をどう役立ててというのか、僕には検討がつかなかった。

(今ほど昔を悔やんだことはないよ……)

せめて甘ったれてないで真面目に勉強に励んでいれば、何かしら出来ることがあったかもしれないのに、遊びたい遊びたいと飛び出せばかりだった僕じゃあ何にも。いや本当に何にもない。

母様や父様どころか教師から庭師にまで甘やかされて甘えまくって勉強もそこそこに遊びまわり、本格的に勉強する年頃になるとさっさと気を狂わせて勉強どころじゃなくなった自分。剣もろくろく扱えない自分。身体が小さいまま成長してなくて、子供のままな自分。鬱々と考えていると我ながら落ち込んで浮上出来そうもなくなってくるけれど、やっぱり。

(やっぱり考えなきゃいけないんだ)

頭をひねって、足を進めて、前を向かなきゃならない。

死者と生者を巻き込んで進む、それが僕の今いる道なんだから。中心である僕が、しっかりしなくてどうする。

心が冷えていく。

冷たく、冷たく、暗い水底に落下するようなーそんな感覚。

(これはきみが味わっていたものと、似ているのだろうか)

すかすかになってしまった一行の中、きみの手を引きながら考えた。人を殺す度に、殺される度に冷たい塊が沈殿していく。そしてじわじわと奥底まで凍りつかせようとする、気がする。

まるで、宮にいた頃のイルザのように。――そう考えて、はっとした。

（ぼくを、凍らす……のか？）

そうだろうか、ほんとうに？

ぼくは凍ってしまうのか。彼を置いて、この手をはなし、安穩と氷漬けになって狸寝入りを決め込むのか。

（――それは違うはずだ）

ぐっ、と握る手に力をこめる。

「……エルザ……？」

緑色の双眸がぼくを見やる。その目に光は、ある。

やっと取り戻した。

やっと取り戻したばかりだというのに、また失われてしまえというのか。

また独り、闇に預けて。

（恐怖に、狂気なんかに、負けてる場合じゃないんだ！）

この冬の国を出れば秋の空がある。その先には春の園が、彼方には夏の海が。

征かねばならない。

一人でも多く、共に。

ぼくは歩く足を止めずに、すこし振り返ってイルザを見た。

「もうすこし待ってて。国境を越えるころには、きつといい名前を考えつくから」

決然と伝えると、きみはひどく驚いたようだった。

ぼかんと口と開けて目を見開き、そのままおぼつかない足取りで数歩進んだ後、「わあっ？」

足をもつれさせて躓いた。

わあっところちらも声を上げながら咄嗟に抱きとめる。

「う、ごめんよ！」

「いや、いいけど……足は？」

「大丈夫だよ！」

「イルザ様、静かになさってください」

先頭のエレノア団長が振り向いて、苦笑しながら人差し指を唇にあてた。

「ごめんなさいと謝るイルザをちゃんと立たせながら、おや？　？とぼくは目をまたたいた。

（あ。……よくよく考えてみると、団長が笑ったところなんて、久しぶりだ……）

道中の他愛ないやり取りも、かなり前のことだった。隠れながらの旅だから、しかながないのかもしれないけれど、いや、しかし。

（いくらなんでも変だ。……というより、みんな変になっていたのか）

会話も減れば塞ぎこみがちなのも当然で、これからは夜休む前以外でも、声を抑えながら何かしら話したほうがいいかもしれないとぼくは思った。

（空気が重いのも状況が状況だから仕方がないとして、重いなら重いなりになんとか）

しよう、と考えたところで、ねえ、とちいさな声がかげられた。

なに、とぼくもちいさく返すと、ふっ、と彼は目を細めて微笑んだ。木陰の続く森の中に、急に光が灯ったような笑みだった。

ねえ、イルザ、と明るさを含んだ囁きが耳朶を掠める。

「国境を越えたら、君が考えた名前、教えてね。ー約束だよ！」  
無邪気なところと笑いはじめたきみに、ぼくはうんと頷いた。

「うん、約束するよ」

雪の下から芽を出す春のように、真新しいきみの名前。

道を示す、希望のひかり。

#### 04・『後ろ手に隠した』

土砂降りの雨が降っていた。

けれどぼくたちは休むことがない。

つないだ手が寒さに震えていても、背後から迫り来ては、追いつこうとするものがあるから。

冷たくちいさな手を背中にかばい、ぼくは進み続ける。

握り返される力は少ない。きゅっと力をこめられても、すぐに解けてしまいそうだ。

健全な精神状態を取り戻したかに思えた彼は、しかしいまだ成長の兆しが見えることがない。

身長は伸びなかった。身体は痩せたまま。足は、早くなった。重いドレスを着ていないこともあるのだろうが、以前よりは身軽で、よく動く。長く歩き続けられる体力もつき始めて、最近ではヒューズ副長に運ばれることも減ってきたように思う。

(それでも、きみは無力だ)

雨音の合間を縫って、苦しげな息遣いが耳に届く。

幼少のころ、パークランドで共に屋敷の庭を駆け回ったこともあった。そのころから、イルザはぼくの後ろで息を切らしていて、どうして泥遊び向きには見えなかった。ましてや王城の中では部屋で座り込むばかり。根本からして走る運動に対応して作られてないのかもしれないなんて思うこともある。

それでも自分で足を進めるのは、背後の道にしたたる血のせいだろうか。

(だとしたら、なんて哀しい)

ぼくの背後にいるのは、麗しのきみ。

夜空の黒髪、けむるまつ毛の、濃い翳を落とす緑の鏡。蛾のように

白いすべらかな肌。質素なローブのフードの下から、人を魅了してやまないこの世の神秘。

(きみはこんなにも華麗なのに、沢山の痛みを隠し持っている)  
実の兄に命を狙われ、自分の騎士を殺され、祖国を追われ、心の傷を抱えながら、運命の輪に廻される。

今も、そうだ。

(なぜこんな、悲劇の主人公みたいな目にあわなきゃいけないんだ)  
キーン、と甲高い音が後ろから響いた。  
追いつかれたのだ。

ぼくはイルザの手を引つ張って前によこし、腰の剣を抜いた。

「走って！」

後ろを振り返ろうとした時、顔の横を掠め、何かが木に刺さった。  
確認している暇はない。

ぼくはそのまま剣を構え、後方に走り出した。

国境に近づくにつれ、追いつかれることが多くなった。

それは最初に送り込んだ追手が追いついて来たのか、焦って沢山送り込まれているのか。それは分からないが、どちらにしろ危険なことは変わらない。

隠れるか、足を早めるかの選択に、僕らは足を早めて国境を越えることを選んだ。だから土砂降りでも、国境付近では滅多に降らない雪が降っても、僕らは足を止めない。

(けど、正直……フラフラだ……)  
目眩がする視界の中、雲を踏むような足取りで走る。吐き出した呼吸が熱い。

キン、キンと響く剣戟の音に触発されて、耳鳴りまでしてくる。  
思わず両手で耳を押さえた時、ヒュンッと風を切る音が通り過ぎて、木の幹に深々と矢が突き立った。

(ーあ)

一瞬、頭の中が真っ白に漂白され、気がつくとは僕は屍餅をついていた。少し遠くの腐葉土の地面に二本目の矢が刺さっている。

(に……逃げなきゃ)

四つん這いに横に逃げて、ヒュン、と身体を撫でた音に駆られるように覚束ない足取りで木の陰に身を隠した。

幹にもたれてズルズルと根元に座り込む。

(……どうしよう)

逃げられないし、それに。

逃げたくない。

エルザが来ない。

エルザが、いない。

ぞっとした。

エルザはいつも僕を連れて逃げていたのに。

剣で貫かれたベアトリクスが脳裏に蘇る。溢れ出て地面を濡らす赤黒い血液、見開かれた無機質な目。

(いやだ)

いやだ、いやだ、いやだ。

先鋒から走って来たエレノアがあっちに向かっている。

僕も、向かえたら。剣を、取れたならー！。

けど、僕は出来ない。

土砂降りの雨が降っている。木の葉の生い茂る森の中は、雨に叩かれる葉の音で満杯で、今は甲高い金属音が割り込む。

冬の国の、黒い腐葉土の森。

そこで僕は、君が追いつくのを待っている。

目を閉じて膝を抱えて、息を潜ませて。

永遠にも感じられた長い時間、それが途切れさせたのは土を踏みしめる足音。

すぐ後ろからした音に振り返れば、

「避けるおっ、エルザああああ！」

きらきらと光る刃、がー

追いついたのは、知らない誰かと君の悲鳴。  
息を呑む間もなく、振りかぶられた刃が一閃するー！……

## 05・『切り裂きナイフ』

果たして血に濡れたのは――

僕の、ナイフ。

ずるり、と傷口から血を吐き出しながら身体が転がり、その横に落ちた白刃が雨に濡れてゆく……。

――背は指の幅も伸びなかった。足だけは早くなった。気配を殺すことも、初めに比べれば上手くなった。それでも、この身体は優雅に暮らす事にしか向かないと己が痛感している。

以前より痩せた手の指。それでもなお、無意味に美しい華奢な手。力はまた無くなったかもしれない。それでも、まだ。まだ人を切る力くらいはあるはずだ。あの時のように隠し持ったナイフをそっと確かめて、短く息を吐き出した。

きつと、出来る。だってあいつらは僕が刃物を振りかぶる想像さえしないはずだもの。僕の華奢すぎる手指は、そういうことを誤魔化す時だけ役に立つ。

どんなに小さくて無力に見えても、この手の皮膚下には硬い骨と筋肉があつて、敵の喉首を搔っ切るくらいの動きが叶うことを、敵に知らせないでくれる。

僕はまだ生きていた。



あかい滴の伝うナイフを握りしめ、僕は亡骸の前に立つ。

目を閉じて思うのは肉を断つ感触。皮膚を裂くのはあっけなかった。肉を断つのは鈍く、意外に柔らかいかと思えば筋に当たると硬く、無理やり引き裂いた手首が痛む。？

人を斬るのは簡単だった。相手から懐をがら空きにして近づいてくれるから、僕はナイフを手に相手の懐に立ち上がれば良いだけなのだ。

そう、簡単だ。

(でも、この疲労感は何だろう……)

一步よろけて、もたれていた幹に縋りつく。座り込みはしなかった。確認しないといけない。見ないといけない。

(エルザ、たちは……)

だって、僕のところまで敵が来たんだ。おかしい。追手にはいつも奇襲されるけれど、僕に襲いかかるまでに到達したやつはいなかった。それが、今回は。

(振り返るのが、怖い……)

そこに、君はいるの？

ゆっくり、恐ろしくゆっくり、僕は首を傾けていく。木肌をのろのろと過ぎた視線の先、獣道を辿って、僕は今度こそ座り込んだ。

足元に知らない誰かを転がして呆然と僕を見ている赤毛の少女。その横には同じような体たらくの騎士たち。

(なんだ、元気そうだね……)

ぐるり、世界が回転する。

目を覚ませばいつかのようにエルザの背中、目を開けるや否やぐりんと前方のエレノアの首が回転した。もちろん身体ごと。

そのまま泣き崩れる勢いで平謝りするのにヒューズその他まで加わり、たぶん本当はそれに参加していたはずのエルザは僕を背負って

いるせいで傍目上役に謝られているという状況にたいそう居心地が悪かったらう。ちなみに僕も居心地が悪かった。

（みんなが、やっている事なんだし……）  
そんな恐縮する事ないのに。

おかしくて笑っている、変な顔をされた。

いいよ、べつに。なんでも。

土砂降りも止んだし、地面はぬかるんでいるしもう暗いけれど、夕陽が差して水滴だらけの森の中は眩しくも美しい。

それにー

（もう、国境を越えた）

寝ている間になんて感動もへったくれもないけれど、それでいい。なんだっていいんだ。

首に回した腕で抱きつく。君はびくともしない。

（ーああ、聴こえる）

エレノアたちが木々の合間から見え隠れし始めた光に騒ぎ出す。  
篝火だ。

（あれはきつと、秋の木霊の祭禮、かな）

妙なる楽の音が届いてくる。

森を抜けた場所にあるのは、伝え聞きにしかなかった異国の祭礼。

鮮やかに色づく煙を上げる不思議な篝火、まだらに染めた布を被って収穫物に化した人々、大きな葉を手に踊る行列、村の中心で燃える焚き火、丸太に座る吟遊詩人が陽気な歌を歌ってる。今日だけ、布を被れば秋の国の中では誰にも見咎められないという。

僕らは顔を見合わせて、フードをかぶり直した。  
背中から降りると、エルザに呼び止められる。

「エルザ？」

首を傾げれば君は微笑む。

「ほら、約束したたらう、名前をつけるって」

「あつ！？……決まったの？」

「うん、ばつちりだよ」

ぜったい気に入るよ、得意げな君に焦れて、はやくはやくと急かせば、君は腰を屈めて僕の耳に口を寄せる。

秘め事のように囁かれたのは――遙か遠い神話。美しくも呪われることのない、その名前。

「どうか」

頷く代わりに、僕は彼女の頬に手を滑らせ、唇を重ね合わせた。

（うん、最高だよ、エルザ）

でも、本当は何だってよかった。

君が名付ける事だけに――意味があつたのだから。

## 05・『切り裂きナイフ』（後書き）

次で切り裂き（ジャック）ナイフは完結です。  
ずいぶんお待たせしたのに情けない出来ですいません。

Fin・『緑眼に宿る悪夢』

殺し殺され、この旅は続く。

その歩みが止るのは、明日か、今日か。

僕の見通せぬ未来、しかし夢見る希望はまだ遠くに光っている。

そして僕はまた悪夢を連れてくる。

降りかかる先は――まだ知らない。

僕か君か、それとも未来に知る誰かか。

僕らが未だ知り得ぬ未来。

君が僕を連れて行く、未来。

連れて、ゆく。

永遠に悪夢に囚われたままの、僕を。

君は連れてゆくんだ。

いつか君は、真っ暗な夢からも僕を連れ出すかもしれないと、少しだけ夢想する。

フィン・『緑眼に宿る悪夢』(後書き)

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7309p/>

---

イルザは僕を殺したい

2011年5月22日00時36分発行